
インパクト

K.A FANTSY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インパクト

【Nコード】
N1452P

【作者名】
K・A FANTASY

【あらすじ】

平穏な中学生ライフを謳歌する立岡瑛と仲間たち。いつものように集まって、他愛のない会話や日常を楽しんでいた。

そんな彼にも気になっていることがある。『日本と、あるアジアの過激な国との関係が悪化している』ことである・・・

いま、いつどこで国どうしの争いが起こってもおかしくない時代。世は、あるひとつの独立国に対して、警告を促す。しかし、見えな
いところで、ある計画は実行されようとしていた。

それがもし起こったとき、始まったとき、人間は何を思い、なに

を願うだろう。すべてがたった数時間で終わってしまったら・・・リアルな描写と人間関係を綴った物語、それが『インパクト』である。

ACT・1 広がる世界

どんだけ願っても、どんだけ夢見ても、叶わないものがある。
どんなに縋っても、どんなに逆らっても、変わらないものがある。

今までの世界だったら、こんな何もかも上手くいかないときには、
苛立ったり、誰かにその苛立ちをぶつけたり、やる気を失くしたり
と感情を剥き出しにすることができただろう。

でも、今はちがう。

誰もが喜怒哀楽を忘れてしまっていた。いや、やろうとしなくなっ
たのだ。自分の中に溜まっていくストレスや思い、考えを
表現しても、無駄だということに気付いたから。

どれだけ頑張っても、どれだけ努力しても、届かない目標がある。
どれほど粘っても、どれほど這いつきばっても、最後には
壊されてしまう希望がある。

今までの日常だったら、どんな不幸や理不尽には、へこみ、生きる
意味を失い、途方に暮れることができ、ある日突然その背負ってい
た憂鬱感から開放されることができてだろう。

でも、今はそんな幸せはない。

誰もが自分の悩み意見を気軽に話せる相手がいらない。誰が本物
で、誰が偽者か判らない状況に置かれているから。

こんな話信じてもらえるだろうか。

もし、これまで過ごしていた当たり前の日常が、たった数時間で終わってしまったら。いつもどりの風景が眼の前で消えてしまったら。

「こんな絵空事……。」「そんな一言でこの地獄から抜け出せたらどれだけ幸せだろう……」

当たり前の日常が爆ぜた世界で、僕たちは本当の自分であるために、生き残るために戦う。全てを奪った存在に抗い続ける。

「まだ、僕たちは……いきてる」

11月もあと10日余りで終わるころ、中学校最後の期テストもなんとか乗り切って、一息ついた。これからの進路のことが毎日付きまとってくる。内申点や評定のことには、一抹の不安があるが。いまは、やっと手にいれることができた安息に浸っている。

たておかあきら立岡瑛、それが僕の名だ。別に飛び抜けて運動神経や頭が良いわけではなく、これと言って特徴がない。そんな試練が過ぎた翌週の昼休み。特にやることもなく屋上へ向かった。僕が通う福岡県千草市にある常葉中学校（じよば）は、生徒数200人のこの辺りでは大きい学校だ。周りは都会でもなく、田舎でもない。俗に言う普通の学校である。屋上に出る扉を開けると、今まで歩いてきた廊下や階段に比べ

て対照的な、そして、いつもより明るく見える青空が広がっていた。それは、地獄のようだったテスト期間中の疲れをすべてどこかに吹き飛ばしてくれるような気がした。

扉のすぐ横に最近常葉中が導入した太陽光パネルへと続く鉄階段がある。その奥には、僕のお昼寝ポイントがある。前はよく陽がある広い敷地のど真ん中が好きだったが、いまでは、太陽光パネルがある少し狭い場所がお気に入りとなっている。鉄階段を上ってさらに高い所に来た。手についた赤茶色のさびをはたきながら、「ハア〜」、と息を漏らしてつつ寝転んだ。

満天の青空がさらに広大に見えて、周りにはこの快晴の空を邪魔する建物がなく、存分に堪能できる。11月の寒さに太陽の陽が直接当たって気持ちがいい。時折上空を飛んでいく鳥や飛行機を「ぼ〜〜」と見ていると、だんだん瞼が重くなってきた。僕は緑色のコンクリートの床に溶けるように脱力すると、ゆっくり目を閉じた

……ん!?……身体が動かない……プラス上半身が上に持っていける!? 顎に誰かの腕が回されている??? 「こ、これは——これは腰と背中がありえない方向に曲がつていまだかつて体験したことのない痛みと苦しさが絶妙なハーモニーをかもしだしてつつつ!!!……っし、死ぬ!死ぬうう!!!」

「んお!お目覚めかい旦那!いま、マッサージの途中なんだけど、起きちまつたかい!」

「人生最悪のタイミングでマッサージされとる!じゃない、そうじゃない!これは四方八方どこからどう見てもキャメルクラッチだ!は、はやく……はなせ……息が……」

「ま、こんくらいかな?」

パツ、ドサツ

「ふぐつ」

「おつかれっ気持ちよかった?」

「いままで生きてきた人生の走馬灯がみえたわ!」

「それはよかった。そのまま昇天させてもよかったけどな？」

「卓斗おゝ貴様、ひとの昼寝を妨害するだけでなく、短い人生にピリオドを打とうするとは！」

危うく家族や知人に別れも告げずに旅立ってしまうところだった。

「まあそう怒こらんで、お前にメリットがある情報があるけん」

そう言つて人の機嫌を直そうとするのは井原卓斗である。いはらくとクラスメイトで小学校から仲がいい。まあ一番気軽に話せる親友である。

「ほう、申してみい」

「はっ、実は先日そなたから借りた。。。 (自主規制) が紛失してしまつたのじゃが・・・」

「よし、卓斗。うつ伏せで寝ろ」

「はい」

「動くなよ？」

「心得ております」

「なにか言い残す言葉は？」

「えっ？俺ここで終わるん？いやだあゝいやだあゝ」

「最期の言葉は？」

「俺を育ててくれた父さん母さん。いままでありがとう。あなたの息子として生まれてくれてよかった——あうっ！！」

ぐぐっ、メキメキっ

「なっ、まだ全部言つてな・・・いつの・・・に」
「・・・」

「まつて・・・待つてくれっ。お詫びに2学期最後の給食のケーキをやる・・・だから、らから、ゆるすてゝ」

「ロールトチキンも」

「それじゃ俺スープとロールパンしか食うものな・・・い」

「バイバイ(笑)」

「わ、わかつた・・・やるけん・・・離して——うおっ」
ピターン

顔面から勢いよく離してやつた。

「ぐっ」

「いまの台詞わすれるなよ？」

「は、はい・・・ホントすんませんでした・・・全力で探します・・・」

人の大切な秘蔵。。を失くした愚かな生き物は、鼻を押さえながら涙した。

*

ざわざわ・・・コツコツコツコ・・・

パパアツガア・・・

たくさんの人と車が行き交う街、東京。さまざまな情報と物が集まるこの場所は僕にとって、一度は行ってみたい憧れのところ。道を歩いていけば不意に声を掛けられていきなり芸能界入りなんてことも無くもない。流行の最先端にあるこの日本の中枢で、最近よくニュースになるある出来事がある。それは『日本と、あるアジアの過激な国との関係が序々に悪化している。』ことである。なぜそのような対立がおこっているのかというと、それは、長いアジア諸国の関係性に理由がある。

事の始まりは、ある国でおきた小さな紛争である。長い間民族どうしの争いがある日を境に周りの国を巻き込んで、さらに激化してしまったのだ。当時の日本はただちに争いをやめるように呼びかけた。しかし、争いの原因となった国の政府機能はすでに崩壊し、日本の注意を受け入れることができなかったのだろう、ますます激しくなる一方だった・・・

そんな中、まだ戦争の影響を受けていない国の国境付近で攻防を繰り返していたある国の兵の撃った流れ弾が、国境付近にたまたまいたある男に命中したのだ。彼の身元を調べた結果、国籍は日本であることが判明したのだ。なぜ戦いの最前線にいたのか、そこでなにをしていたのかはわからない。ただ、偶然その場所において、偶然

身体のだ真ん中を飛んできた弾丸に打ち抜かれたのだ。もちろんこの情報はすぐに日本に伝わり、報道のトップを飾り、新聞の一面に載った。これを受けて日本政府は、近隣諸国を巻き込んで続けている争っている国々に対して、緊急の対策案を練りだした。閣議の結果は『平和的な解決方法のほかに、この問題を終わらせる手段はない。』である。当然の決議だった。もしこれで、『軍事的解決手段』や『開戦を求める』といった日本国憲法に背くことになると、以前犯した同じ過ちを再び行うことになるからだ。国連や連合国の仲立ちもあつて、停戦を促す警告を発令させることに成功した。

しかし、またいつ再戦してもおかしくない状況にある。現在、この戦争の発端となった国に国連は終戦し、争わないように徹底して呼びかけている。内容は僕達国民には詳しくは知らないが、もし、また戦争が始まったら日本にもそれに巻き込まれる可能性がある。あまり深入りしないで、あとは国連に任せたほうがいいとは思うけど・・・

*

「・・・ん、わかった・・・」

ガチャ

「総理、相手国側はなんと？」

「軍事的解決、それ以外受け入れてもらえないようだ」
ドン！

「くそっ！いまこの時代に争いでしか解決できないものは無いと思っ
っていたのにっ！」

「・・・」

「総理、どうなさるおつもりですか？」

「・・・この国を戦争の脅威から防がなくてはいけないことは確か
だろう、守るためならあらゆる手段を使ってでも・・・守らなければ
ならない。だが、断じて人の生命を奪ってはならない。それで解

決して、真の決着にはならんだろう。愛する家族や親友を殺されればどうおもうだろう。相手を恨み、憎しみ、そして、それがまた新たな争いの火種になる・・・我々には、そんな悲しみと苦しみが残らない破壊という名の兵器に頼ってはならない」

「・・・・・・・・」

「ふつ、総理大臣という日本を引っ張っていかんといかん立場にあるのに・・・なにもできないのだな・・・」

「心中、お察しします」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「鷹野官房長官」

「は、はい」

「私は・・・どうすればいい？」

「つ・・・・・・・・」

ACT・2 予兆

翌日、昨日の一件から一転して、しんと静まる3-4。僕のクラスである。

「ついに来たな・・・」

「ああ、合計で負けた方がおごりやけんな」

「わかつとーし」

とうとう期末テストが帰ってくる日、辺りはざわつく中、僕と卓斗は、その瞬間を静かに待つ。

「じゃーあ、テストを返します。出席番号順に取りこおい」

先生の口から間延びした口調の声が放たれた。

「相上・・・よくがんばった。飯尾・・・おしつ、いいぞ」

「ごくつ・・・」

「井原」

「よ、よし」

がちや スタスタ・・・

「・・・」

「・・・つて、なにも言わんのかい！？なんか一言くださいよ！」

「はあ~~~~」

「ええ！？そんなに？掛ける言葉もないくらいひどいですか？そんな~~~~」

スタスタ・・・がちや

「ど、どうだ——」

「まだなにも言うなー！！！！」
「わ、わかった」

木原く…………小室く…………坂元く…………

「杉田く…………あと少しだな。…………立岡く」
「…………」

がちゃ スタスタ…………

「…………」

「…………せんせ？」

「…………ううっ」

先生の目から光輝きながらこぼれるなにか…………

「まさか…………せんせ！」

「…………」

「そんなに？」

「…………（こく）」

「はあく…………」

うなだれながら席にもどる。

がちゃ

「…………」

なんともいえない重い雰囲気。ただ、互いに考えることはただひとつ。

「「勝負やめとく？」」

*

「総理、会合に出席中の宮田外務大臣からお電話です」

「・・・わかった、変わろう」

がちゃ

「わたしだ、・・・ん、・・・ほう・・・そうか、分かった、また連絡する」

がちゃ

「・・・総理、お時間です」

「・・・そうか・・・」

「うまく、いきますかね？」

「我々が弱気でどうするね。ん？」

「そうですね・・・」

「どのみちこの課題を始末しなければ、国民の未来はない」

「その国民ですが、一部で戦争を盛り立てる者がでてきているようです。マスコミも、一連の事件に関して、戦争を関連付ける報道をしています。なにか、手を打たないと」

「会見を開くには、あまりにも早い。それに、国民にそれが知れて、どんな形でそれが世間に広まっていくかわからん。話すときが来たら発表しようじゃないか」

「わかりました」

「うむ・・・では、いこうか」

「はい」

*

その日の6時間目、ホームルームで担任の先生が前で、高校入試について話していた。ぶっちゃけ、先のことなんて決まっていな。高校も低いレベルのところを選んで、三者面談こそ12月のことだが、

適当に繕って済ませてしまおうと考えているところだ。

「……………」

「ねえ、瑛？」

「……………」

「あきらっ？」

「……………」

「あきらってば！」

ぐきっ

「ぎゃーーーーーーーー！！？」

ざわざわ……

一気に注目される。みんなの視線がすべて僕の方を向いている。

「立岡、どうした？」

「いえいえ、なんでもありませんよ？」

「そーか」

ふう〜とりあえずまいたか。

「いってえ〜〜なにしてた？」

「返事してくれんけん、瑛の左手の小指の関節をひとつ増やしてやったと」

僕の左手の小指の関節をありえない方向に曲げてくれたのは、ちいさいときからの幼馴染で、よく遊んでいた鮎沢茜あゆさわあかねだ。ツインテールの長い髪で、小柄でスレンダーな奴だ。僕の隣の席にいる。

「真顔で恐ろしいこと言わんで？で、なに？」

「進路！どーすると？」

小声で話しかけてくる。席の位置は、一番うしろの窓側だから、ちいさい声だとそんなに気づかれない。

「ん〜普通の高校いく」

「普通のつて・・・そげん真剣に考えてなかる？」
「だって、決まってるじゃない」
「しらんよ？将来ニートになっても」
「ふんっそんなならんし」
僕は、外の遠くを見る・・・ふりをした。
「またいじける・・・」
「・・・」

トントン

右肩をトントンしてくる。
「なん？」

ぶにつ

「・・・」
「・・・（にこっ）」
「このやる！おちよくつとーとやー！！」
「あー女の子に手えだすと？さいてーやん」
「やかまし！茜の指も俺の指とおんなじ形にしてやる！」
「ちよっ、ガチで？うそやろ？」

「有言実行！！」
「やああああつ！？」
「うしろ！騒がしいぞ！」
「・・・（ピタッ）」

みんなの視線が痛いように突き刺さる。先生の一言でこの場を一気に沈静化させた。

*

帰りの会終了後、先生に厳重に注意された僕と茜は、並んで校門前に向かった。そこには、クラスメイト達が待っていてくれた。僕と茜は小走りでその集団と合流した。

「なんや？だれもおらん教室で、ふたりでなんしよったと？」

「なんもしやらんし！」

「・・・（かあああ）」

「赤くなんな！！茜？俺達なんもとらんよな？」

「・・・（こく）」

「っ！！！」

や、やばい！なんか茜の样子が180度変わってしまった！いつものやんちゃな顔が真つ赤になっている。

くそっ！卓斗あ！いらんことばっかり言う・・・でも、ちよつといま茜が・・・可愛く見えた？

「いやいや、ほんとになんもないから！」

「またまたあ・・・じつは少し気になつとるっちゃないと？」

「いきなり素に戻んな！なんだ、いまのもおちよくつてたのか！めっちゃ焦ったやんか！ちくしょー！」

少しでも恋心をときめかせた自分に腹が立つ。しかも、あの茜を可愛いと思ったのが余計恥ずかしい。

まあ、たしかに茜はクラスの中では「美少女？」に分類されるかもしれないけど、俺だって本気をだせばこんなやつ――

「ところでさ瑛くん、例の件、どうだった？」

絶妙なタイミングで話題を切り替えてきたのは、クラスメイトの太田直樹だ。おたなおきいつも必要以上にしゃべらず、常にメガネを掛けていて、

一見「勉強とくいです」的なオーラに満ちているが、じつは、成績は悪く、自分が興味のある事しか知ろうとしない。まとめて言うとはバカだ。しかも、「これ、知ってて今後の人生に役に立つか？」と思う雑学や知識が脳に蓄積されている。要するに、どこでもいいときにその能力は発揮され、一番肝心なときに、存在価値が一気に失せるくらい使えないのである。

「ああ、あれね。え〜と・・・うん、よかったよ?」

「やはり、僕の目に狂いはなかった・・・そもそもメディアというのは――」

ああ、すでにお前が狂ってるよ・・・なぜそれほどの知識を知ることが出来る能力を勉強に使えないのだろう。己の愚かさにそろそろ気付いてもいいだろ・・・あんまり人のこと言えないけど。

「あのおゝ立岡くん?」

うしろから小さな声が聞こえてきた。立華^{たちはなみお}さんだ。こちらはおとなしい性格でどこか抜けてるところがある天然キャラである。茜とは逆に、まるで空想のアニメキャラクターのような大きな瞳と、ふわっとした長髪、そしてなによりもそのあどけない表情がたまらない。あまりに美少女すぎて、周りの男どもは、ぜんぜん近づくことができない。まさに神さま、いや、お釈迦様のな存在である。

「ああ、立華さん。どした?」

「あ、えと、いいんですか?わたしここにいて。なんか邪魔してないですか?」

じつは彼女、家の都合で日本海にある小さな島から最近引っ越してきた。なんでも近頃続いている『日本とアジアのある国との争い』の場に近いか『巻き込まれる可能性がある』とかでここにきたのだ。理由はどうであれ、せっかくこんな可愛い子に巡り会えたんだから、仲良くならないと損である。

「ぜんぜんそんなことないよ!むしろ大歓迎!」

「そ、そうですか・・・よかった」

「仲良くしようよ」

「は、はい」

「・・・」

さっきの三人が、僕と立華さんのやりとりを黙視している。なんだか見てはいけないものを見たときのほそーい冷めた目で。

「なんや?」

「・・・なんも?」

バツ！ スタスタスタッ

『あいつ、立華さんに気があるみたいだよ』
『っ！？』

ん？卓斗が立華さんに耳打ちでなにに言っている。嫌な予感が盛大にする。

「卓斗、立華さんになにを言った？」

「ん？なんも？」

「秘蔵。。。の件——」

ダッ！！（卓斗が全力で逃げていく音）

ヒュン！！（僕が無表情で逃亡者のあとを追う音）

まったく卓斗のやつ、発見したら最期の言葉を聴いてやらないと。

『いやっさすがにその体制はムリ・・・』

『・・・』

『ちよっ、無言！？かんべんしてくだぎゃあ~~~~~！？』

罪を犯した生き物の悲鳴が陽の暮れだした町にこだました。

ACT・2 予兆（後書き）

読んでいただき誠にありがとうございました。

読んでの感想と評価を書いていただければ幸いです。おねがいします。

あとわたくしK・A FANTSYの活動報告も一度のぞいてみてください。

ACT・3 アキラ

卓斗に裁きの鉄鎚てつづいを下し、もういちどみんなと合流し下校する。
他愛のない話や今日の出来事を話合った。歩く先には、夕日がまぶしく輝いて、並んで歩く僕達の影を長く写していた。なんというか、一日の終わりって感じがして、なんだか切ない感じもするが、この帰り道が一日の中で一番盛り上がり、一番楽しい。

ずっと、このままが、いい・・・

「じゃあ、俺たちこっちな」

「おう、またな卓斗、茜」

「じゃあね」

「ああ」

「僕はこっち・・・」

「わ、私も・・・」

「そっか、そんじゃっ」

道が十字に分かれる、みんなそれぞれの道を歩いていった。僕は、少しその場で立ちつくし、空を見上げた。わずかに漂う雲に夕日の明かりでオレンジ色に染まっていた。見ているだけで誰もが気持ちいが和む風景のはずなのに、僕の心境は重く、やるせない憂鬱感に自分の体が飲み込まれていく。

「かえりたくねえ・・・」

*

現在、この議事堂内では、ある国会討論が繰り広げられていた。

「総理！いまのこの外交状況について、どうお考えですか？」

「えー、一刻も早くの解決に向けて、現在、内閣で討論しています」

「その討論の結果は、今後の日本にどんな影響があるのか、そのことをお考えの上での話し合いですよね？」

「十分、そのことを踏まえた上での討論で、国民に納得がいくようにと、我々はそうおもっています」

「それを実際に行うための権利は、総理！あなたにあるんです！そろそろ決めていただかないと、

マスコミにどう説明するつもりですか？」

「・・・」

「総理！答えてください！」

「・・・話すときが来たら、すべてをマスコミ関係者および、国民に打ち明けるつもりです」

「そこまで国民は待ってくれませんよ・・・？それに、議員のなかでは、総理自身の責任問題だという声もありました。そのことदनか、ご自身で自覚はあるんですか？」

「・・・それについては、この問題を解決できなつかのなら、総理大臣という職を辞任することもかんがえています。ですが、まだ国民のみなさまが心から支持してくれるなら、わたしはまだ続けたい、続けなければならないとおもっています——」

ある一国の総理大臣が、自分の立場をかけてこの『終わらない争い』に終止符を打つことを表明したのだ。しかし、この言葉は己の首を己で絞めることになる・・・

＊

「ただいま・・・」

我が家に帰ってきたはずなのに、まるでひとの家におじゃましたかのような上がりにくさがある。

がっちゃ・・・

しずかに玄関のドアを閉める。

「はあ・・・いるのか・・・」

一足の茶色の汚れた雑巾のような靴がバラバラにほつたらかして散乱している。僕はそれを無視して自分の靴を脱ぎ、中に嫌々入る。家の構造は一軒家で、少し古びた木材の家。別に構造上、不便なことはないが、強いて言くと、家に入っすぐの廊下の隅に放置されてあるビール瓶の山。どうにかしてほしいものである。

バリーン！！ガシャン！！

『このやろ！！ふざけんじゃねーぞお！！』

ガタツ、ゴトツ、

『や、やめて・・・』

『おらあっ！！』

ガツツツ！！ボタン・・・

男の罵声と共に鈍い音が響いた。聞こえてきたのはリビングからのようだ。

『うつっ・・・』

うめく声、おふくろだ。

とんとんとん・・・

リビングへと続く廊下をあるき、途中にある階段を登る。

がちや・・・

自分の部屋のドアを開ける。誰かが入った痕跡はないようだ。

ガチャン・・・

鍵を閉め、鞆を机の上に置く。

「ふう〜〜・・・」

やっと一息つける。ぼくは、ベッドに倒れこみ、天井を見つめた。

『・・・』

下のリビングが静かになった。やっと治まったようだ。さっきのうるささはない。

「・・・」

こうしてベッドに寝ると一気に睡魔がやってくる。

・・・ああ・・・意識が・・・

ガチャガチャガチャッ！！

「・・・!？」

突然の音に、眠りかけていた意識が戻ってきた。

「ああ！？なんだ？鍵なんかつけやがってえ～～～～」
「……………」

「あけるっ！！こらあ！！ぶっこわすぞ！！」

……きた。あいつだ……

ドンドンドンッ！！

「おい瑛あ！！帰ったんだろ？ただいまは？」

僕が帰りたくない理由も、玄関前のビール瓶の山も、おふくろが苦しんでいる理由もすべて、こいつが原因だ。

「……………」

「あきらくうくん、父ちゃんだぞぉ？」

「……………」

「…………くそがつ！！おい！！開けるよぉ！！」

ダンダンダン！！

「うるせえ～～」

こうなったら、奴は僕がこの部屋のドアを開けるまでいる。まったくめんどくさい人間だ……

「はぁ」

ギシッ

ベットから体を起こし、奴の声とドアをたたく音がする方へ向かう。

がちや、きい～～

「おっ？」

「・・・」

「なんだ、いるなら早く開けてくれよぉ」

こいつだ、こいつが我が家を壊した男。

僕の・・・親父だ・・・

「・・・」

「ん・・・ちくくらすくすするぞぉ」

親父は、いや、男は、僕の部屋に入り込もうとした。

ガシッ

男の右腕を掴む。

「・・・あ？」

「・・・はいんなよ・・・」

「・・・なんだ？」

「はいんなっていいよったいつ!!」

ドンッ!!

おもいつきり突き飛ばした。男は、うしろの壁に背中をぶつけた。

男は、ゆらゆらおぼつかない足取りで、近づいてきた。

ガシッ

「お前・・・」

胸ぐらをつかまれた。目の前には酒臭い顔面があった。ち、ちかい・
・っ!!

「・・・」

「……………」

しばらくの間、顔をずっと見られた。僕は呼吸に苦しみながらも、男の目をじっと睨んだ。すると、みるみるうちに、男の顔色が悪くなっていく。額からは、汗が滲みでている。

「……………」

パサッ

「……………」

いきなり男の腕が僕の胸ぐらから離れた。どうしたというのだろうか。

「……………」

「……………」

まさか！？僕はあわててその場を離れた。いそいでドアを閉める。

ガシッ

「……………」

なぜか男は閉めようとするドアを右手げで止めてきた。

「ふ、ふざけんなよ……………」

冗談じゃない。実の息子の見る目の前で、吐く姿をさらすか！？おかしいだろ！？

「……………」

その場に座り込む男。もう限界なのか！？

「くそっ！！マジでやめろ！！警察呼ぶぞ！！？」

「……………」

「……………」

自分の息子に醜態をさらした男はこのあともしっこくつきまっとなることになる。おふくろはというと、過度のストレスと受け続けてきた暴力で一種のうつ状態に陥った。一度話かけただけでは聞

こえてないのか、返事はなく、体をゆすつても反応ひとつしないようになっちゃった。完全に家庭が崩壊したのだ。くそっ！だから家には帰りたくなかったのだ・・・まだ、学校で嫌いな勉強を一日受け続ける方がよっぽどよかった・・・

だが、いまから一日以内に『いまの家にいる方がましだ』と思える日々がやってくるのである――

A C T・3 アキラ（後書き）

第3話です。

読んでいただいたみなさま、ありがとうございました。

感想と評価をよろしくおねがいします。

K・A F A N T S Yの活動報告ものぞいてみてください。
できたらコメントもおねがいします。

ACT・4 おわりのはじまり

「・・・・・・・・ん、ん・・・・・・・・」

静かな朝だ、昨夜のあれが嘘のような穏やかな一日のはじまり。

「・・・・・・・・ふう、起きるかな」

がばっ

昨夜のあのと、いつのまにか眠っていた。時間割をしていないから、寝起きのあのだるい感じに耐えながら、今日の準備をした。時間割表を見ながら、教科書やらノートやら資料集やらを適当に鞆に入れていく。別にまともに授業も受けてないし、この家にいたくないから、クラスメイトとのいつもどりの日常を楽しみたい。あそこにいれば、勉強はできないが、仲間といえるからすべてを忘れて過ごすことができるから。

「よし」

僕は鞆を持って、部屋を出ようとした。

「・・・・・・・・」

ドアの前で、僕は、立ち止まった。昨日の惨劇が脳裏を横切った。

「・・・・はあ、あ」

うんざりしながらドアノブを回した。ここで悩んでもどうにかなるわけがない。とりあえず今日も学校に行こう。

がちゃ

「うつー!!」

「・・・・・・・・」

あいつがいた。まさかあのあと、そのままここで寝たのか？しかも・

「うわぁ・・・サイアク・・・」

『あれ』も放置されたままだった。早く掃除してもらわないと、二オイが残ったらもうここは通れない。自分の部屋にたどり着けなくなるということになる。それは勘弁してほしい・・・

「うう・・・」

『あれ』を乗り越えて階段を降りてリビングへ向かった。

がちゃ

「・・・・・・・・」

「・・・おふくろ？」

「・・・・・・・・」

「おふくろー!!」

「っ！あ、おはよう瑛」

「おはよ・・・」

おふくろは、ひどく疲れていた。昨日は眠れたのだろうか？目の下に、くまがくつきりできていた。顔のしわも日に日に増しているような感じがした。

「おふくろ、大丈夫か？」

「・・・ん？ああ、ちよつと待っててね、朝ごはん作るから・・・」

「おふくろ・・・」

全く別の返事が時々返ってくることもある。たまに会話が成立しないことだってある。一日中家にいる親父に一日中怒鳴られ、殴られる毎日で、気が狂っているのだろっ。お気の毒に・・・

「・・・あれ？瑛、学校は？遅刻するわよ」
「・・・」

さつきキッチンに向かったはずのおふくろが、手に卵をひとつ持ったまま現れたのだ。さきほど自分で言ったことも、忘れてしまつともあるのだ。

「・・・うん、そうだね・・・いつてくるよ」

「そう、いつてらっしゃい・・・」

「・・・いつてきます・・・」

がちゃ・・・

リビングのドアを開けて玄関に向かう。

おふくろは、見送ってはくれなかった。

これが、最期の母子の交わした会話になることもしらず、僕は、家を・・・出ていった・・・

*

ちょうどそのころ――

「中国、ロシア、そしてアメリカ・・・これで一通りすべての首脳国との会談を終えました・・・総理、お疲れさまでした」

「なに・・・これくらいの大長旅で、日本が巻き込まれずに済んだら、わたしがいる意味がない・・・」

「無理なされず、一度休んでは？」

「何を言う・・・戦場の方々はもっと苦しいのだ、

いまのわたしが休憩などといっていいはずがない。そこで、関係のな

子供たちが親をなくし、食べるものもない、そんな絶望的な状況でも、我々に助けを求めている。ここでなにもしなければ、日本国民をこの手で殺すことと同じだよ……」

「……」

「わたしにも家族がいる。息子はもう自立したが、妻もわたしも、もう歳だ。そのうち誰かの助けがないと生きていけないだろう。そうなる前に……ひとりでも多くの命を救ってやりたい。動けなくなってから後悔はしたくないからな」

「……自分にも妻と息子もふたりいます。もしこの先、戦争が始まってしまったら、子供たちはどうなるのでしょうか……親である自分や妻よりも先に逝かれたら……そんなことを考えていると、今の大人が解決させる以外ないです」

「ふむ……そうになると、ここでじっとしているわけにはいかんだろうな」

「……はい？」

「いくぞ」

「ど、どちらへ？」

「現場だよ」

「……そ、それは……あまりにも危険すぎます……」

「その代表との会談も踏まえてだよ。決して戦場に丸腰でいこうってわけじゃない」

「ですがっ！！あそこの政治機能はすでに崩壊しています。話し合いでどうにかなる相手じゃ……」

「言ったはずだよ、鷹野官房長官。わたしは、人を傷つけるための武器は使わないと」

「しかしっ！！」

「……もし……わたしが、帰って来なかったら……そのときは、あなたに任せます」

「そんなんっ！？自分もいきます……」

「だめだ、なに……すぐ帰ってくるよ、それまでの辛抱だよ」

「・・・どうしても、行くんですか」

「・・・わたしは、本気だよ・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「鷹野くん」

「・・・わかりました・・・警護は徹底させます」

「ありがとう」

「すぐ、専用機を用意します」

「よろしくな・・・」

がちゃ

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・そ、総理っ!!」

「？」

「自分は・・・あなたについて来てよかったです」

「そうかね・・・それはなによりだ」

「これからも、ずっと、未永く、あなたと共にこの日本を・・・変えていきたいです・・・」

「・・・そうだな・・・」

「・・・そうりっっ」

「なんだね？」

「・・・どうかご無事でっ!!」

にっっ

がちゃん・・・

「・・・はあ～～・・・とき・・・かづき・・・とうさん・・・
帰りたいくなっちゃたよ」

しーん・・・

「・・・かなこ・・・おれ、泣いてんのか・・・」

「帰りたいなあ――」

*

「クリスマスう？」

「そつ。なんも予定なかる？」

「予定つて・・・まだ12月にもなっていないのに、そんな先の話さ
れても・・・」

「はあ～～！？ありえん！！」

「な、なんで？」

「クリスマスよ？なんかせんとおもしろくないやん」

「そりやそうやけど・・・」

「やけん！！どこいくかきめると」

「ん～～、どこいくん？」

「そーやね～～」

「・・・つーかさ」

「なに？」

「ほかは？だれか呼ばんと？」

「・・・え？」

「だって、ふたりだけやったら・・・」

「・・・」

「・・・え！？・・・マジ？」

「・・・(こく)」
「・・・」

ふ、ふたりで？

いきなりのことに口の中からありえないものがありえない感じで
出てきそうになった。あ、茜からまさかのデートのお誘い。嘘だろ？

「・・・あきらま？」

「な、なん？」

「あのね・・・」

「お、おう・・・」

「うそよ」

「・・・ん？」

「・・・ぷぷっ、う、うそ」

「・・・」

「あっはははははっ！！やばあ」

「・・・」

「なんどきどきしようとか？まじっける」

「・・・アカネ？」

「あっははは、ん？」

「・・・ロス」

「ん？なんて？」

僕の結論はこうだ。

「コ・ロ・ス」

ダッ！！（茜が人類史上最速のスピードで逃げる音）

しょうがない、いまのうちに残りの人生を楽しませてあげよう。僕もそこまで鬼じゃないから、最期の思い出くらい作らせてやるわ。

「よっ瑛」

「おう」

「なんかいま、すごい速さで茜が走っていったぞ?」

「ああゝゝ、ほっとけばいいって」

「そうか」

やっと卓斗が来た。いつも時間ギリギリで登校してくる。

「な、瑛。実はなあゝ」

「あ?」

「見つかったとって」

「なんが?」

「。。。が」

「・・・ふゝん」

なんだそんなことか、忘れていた。それどころじゃない生活を昨夜送ったから、頭から離れていた。いまそんな話をされても、「そっかゝ!!遅せゝよ!!」って喜べない。まあ、見つかったのは嬉しいけど。

「なんだ、嬉しくないのか?秘蔵。。。だぞ?」

「ああー、そーかー」

「・・・なあ」

「ん?」

「どーした?」

「うん、別にいゝ、なんもないけど」

「そ、そうか」

「なあ、卓斗」

「ん?」

「・・・相撲せん?」

「ハイ!?!」

「おらあ!!」
「はうっ!!?」

ドスッ

「あつ!!くそ!!卑怯者!!不意打ちだとお!!」
「おらあおらあおらあ!!」
「あ、瑛あ!!っは、早すぎる!!バカな!!」

ボタン!!(卓斗を廊下に押さえ込む音)

卓斗の背中に乗り、キャメルクラッチをお見舞いする。

「お、おい・・・その技はヤバいいいいいいったぁー!いつつ!!」
「?」

「・・・」
「お、おい、瑛あ?」
「お前はもう、死んでいる・・・」
「なぜそんな世紀末的な感じ!?!」

・・・コキッ、

「はうっつ・・・」
「あ、ヤバ・・・」
なんか卓斗の腰辺りから香ばしい音がした。立って歩くための大事な部分を破壊してしまったようだ。
「・・・あ、あ・・・」

ピクピク動く卓斗。えび反り状態で、腰を押さえながら固まっている。

キンコーンカーンコー・・・

「ヤ、ヤバッ!!」

ズズズッ・・・

さつきから動かない卓斗を引きずりながら教室に戻る。

・・・ガッツ!

「いっつつたあ~~~~」

「バ、バカ!!でかい声出すな・・・」

ガッツ、・・・ガタッ、・・・ガタン、

「ちょ、ちよつと・・・ありとあらゆるものの角にぶつかってるんですけど!?!しかもピンポイントで腰にあたってるっ、なに?才能あるの?そういう人を痛めつけて楽しむことができる才能があるの?」

「うるせえ!早く座れ!先生来るぞ」

「う、うう~~~~てててっ、・・・よいしょつと——」

こうやって、いつもの日常が始まるのである。いまのは、ほんの少しのやり取りである。こんな感じで一日が過ぎていく・・・はずだった・・・

*

福岡空港

「・・・はい、こちらかんせいと・・・は、はい?いや・・・そんな

なはずはありません。その方向から飛んでくる旅客機はないはずで
す。見間違えかと・・・」

ピッピッピッピッ・・・

「?・・・失礼します・・・え?なに・・・これ?」

ピッピッピッピッ・・・

ポーン・・・

『管制塔員およびパイロット、乗務員に告ぐ。北西より未確認飛行
物体接近中。速度はマッハ3、高度45000、現在、九州北部へ
向かい飛行中。全員、緊急特別処置により、空港内の一般人および、
乗客の安全確保を急げ。繰り返し、緊急特別処置により、一般人お
よび乗客の安全確保を急げ』

『みなさまあ!!係員の誘導にしたがって移動してくださあーい』
『なんだ?なにがあつたんだね?』

『すみません、我々はなにも聞かされておりません・・・』

『なっ!?!』

『とにかく!!進んでくださあーい』

『おっ、おい、どーいうこと・・・』

バタバタバタ・・・

『どうした!本部からの指示は?』

『乗客の安全確保を・・・と』

『くそっ!なにが近ずいてんのかわからんのに、どう対処しろと・・・』

管制塔

「おい！！上からの命令はまだか！？」

「まだなにも・・・」

「ぐっ・・・」

『報告します。飛行物体の速度と現在の位置から到達時刻の割り出しが終了しました』

「よしっ、頼む」

『はい・・・予想到達時刻は――』

「・・・」

『1430、換算すると、あと、1時間15分後――』

「……ヤバイだろ、これって……」

ぼくは学校のテレビを見ながらつぶたいた。いや、絶句した。僕の前にあるテレビに映る映像に、なにがおきているのか、なにをされたのか、まったく理解できなかったからだ。仮にも地元の最寄りの空港が炎に包まれ、黒煙を吐きながら崩れていく様子が映し出されていたのだから。

「……ここで、首相官邸から伝えてもらいます。えー平野さん？」

「……はい、外交会談で留守中の尾嶋^{おしま}総理大臣に代わり、鷹野官房長官が会見を開きました……」

> ……えー、今回被害に会われたみなさまには、心からお見舞いを申し上げます。政府は、この軍事的攻撃をうけて、このような事態の対策を整えてまいりました。現地の被災者のみなさま、そして国民のみなさまには、今後の事態の発展に伴い、ご報告させていただきます……<

> 鷹野官房長官！今回の事例と総理の突然の会談について、なにが関係性はあるんですか？<

> ……いま、わたしの言葉でそれを言うことはできません<

> 今後の両国との対立はどうなるんですか？<

> ……それも、発言することはできません<

「……なんだよ、なんも分からんやんか」

いまの日本は、どうなってしまったのだろう。いつから、攻撃を受けるような国に成り果ててしまったのだろうか。そんなに悪化していたのか。僕はしばらく黙り込んでしまった。

「瑛？」

「ん？卓斗か」

「ああ、どう思う？これ」

「どうって言われてもなあ・・・」

「ああ」

教室の中にあるテレビを見ながら卓斗と話す。いまは、5時間目の途中だが、ごらんの通りこの有様、

教師全員が職員室に戻り、授業が中断したため、それぞれ散らばって、みんなでこの事件の真相を語りあった。

要するにこうだ、小1時間前、突如飛来した物体は、『ある過激な国』が放った長距離ミサイルだった。これが判明したのはさきほど、ということ、当時その場にいたすべての人が、こちらに向かって飛んでくる物体の正体を知らなかったのだ。そして、着弾地点がここだと分かったときはすでに、逃げ切れるわけがないくらい接近していたのだ。管制官は、そのわずかな時間で日本政府にこのことを伝えたのだろう。報道された頃にはすでに、直撃をうけていた、ということだ。

ぐいぐいつ

だれかが制服の袖を引っ張ってくる。

「ん？なんだ茜？」

「・・・なんか、ヤバくない？」

「ああ、そうやね」

「・・・」

「・・・茜？」

カタカタカタ・・・

「・・・！」

茜は震えていた。いったいなにがおきたのか状況についていけないのだろう、不安と恐怖に怯えた表情が、僕には新鮮に見えた。いつも明るい性格と、いたずらな笑顔が、いまはない。

「・・・こわいよ・・・」

「・・・だいじょうぶやけん、だいじょうぶ」

「・・・うん」

いまにも恐怖で押しつぶされそうな茜を慰める。僕は、こんな絶望的な状況を何度も経験してきたから、極力平気でいられる。しかし、不安はあった。このまま行けば、戦争になることぐらいだれにでも分かる。もし、それが現実になれば・・・どうなるのだろう。そんなことを考えたくもない。

「瑛くん」

「ああ、太田くん」

ここで現れたかバカ。まあ、それなりに興味を持つてることだろうから、まったく存在価値がないわけではないけど。

「やっぱり、変だよ・・・」

メガネを動かしながら知的に話す。見た目はそれっぽいんだけどなあ

「な、なにがだ？」

「内閣の動き方だよ」

「は、はあ」

「これだけ攻撃を受けたんだ、これを話し合いで済ませるわけがないんだ」

「つ、つまり・・・？」

「・・・戦争に、突入するかもね」

「・・・」

言葉が出てこなかった。実際にそう言われるとますます現実味が増してくる。本音を言うと、ビビってしまったのだ。これからおきることが、もうすぐかもって思うと気分が悪くなる。吐き気だつてするし、泣きたくなる。でも、これが現実。まずは、ありのままを受

け止めることが、平常でいられる雄一の方法だと自分に言い聞かせる。

「・・・あれ？」

立華さんは、自分の机に向かっていた。ただ黙々と、自習をしていた。こんな事態だつてのに、よく平気でいられるなあ。いままでの彼女のイメージは、いつもおっとりしていて、持ち前の天然でむしろ、この場を和ませてくれるような存在だ。あるいは、この状況を理解できず、おろおろするかだろう。ちよつと、声をかけてみよう。

「・・・立華さん、えらいね、こんなときでも勉強できるけん」

「・・・」

「・・・立華さん？」

「・・・こわいです・・・」

「・・・」

「・・・わたしだつて怖いです・・・こんなこと、受け入れたくないですよ・・・でも、なにかしてないと・・・頭を動かしていないと、恐怖に潰されそうなんです」

「・・・」

「なにかしていれば、それに集中できるから・・・余計なこと考えずにいられるから・・・」

彼女もまた、恐れていた。恐怖を紛らわせるために、得意である勉強をしていたのだ。

・・・現実には、目をそらしていたのだ。

『人間は、見たくないものを見ないでいようとする』

そんな社会の先生が言っていた言葉を思いだした。いまの現実から早く抜け出し、『もと』の世界にもどりたがる。または、『自分の世界』に閉じこもってしまうのだ。当時は、そこまで気にしてなかったが、いまは、その状態に自分が陥っている。自分は、冷静でいられるか、落ち着いて行動できるか心配になった。だれもが、この

考えを持っているのかどうかわからない。だが、この窮地を打破すべく、いまずべきことをやろう。いつか必ず、なんとかなる。そう信じていたい――

*

非常時特別対策本部――

現在、福岡空港襲撃事件の関与の追及と、敵国に対する対応に追われていた。

「現在、消防の必死の消化活動が続いていますが、いまのところ、炎の勢いはおさまっていません」

「被害者の数は？」

「死者・行方不明者354人、負傷者578人、なおも増加する可能性があります」

「敵国の動きは？」

「現在、尾嶋総理が会談で敵国に訪問中ですが、妙な動きはありません」

「・・・総理からの連絡は」

「いまだ、ありません」

「・・・大事なければいいが・・・」

「・・・」

ピピピピピピピピ・・・

ヴィーン、ヴィーン、ヴィーン・・・

「！？なにことだ！！」

「・・・電力会社からの電気供給がストップしました！！まもなく電源が落ちます」

「な、なぜ!？」

・・・ばつんっ!!ヒュウウ~~~~ン・・・

「!!」

「非常用電源に切り替えます」

ヒュイイー・・・

「どれくらいもつ？」

「およそ、2時間程度かと・・・」

「くそっ!!原因は??」

「衛星からの電磁パルスと思われますっ!!」

「なんだと!？」

「全国の電子機器がいかれています。これは・・・一種の電子攻撃かと」

「・・・」

「長官、ご命令を・・・政府との連絡も途絶えました」

「・・・」

「長官!!」

「っ!!敵国の攻撃とみなし、ただより日本は、戦闘状態に突入するう!!」

「了解!!」

「了解!!」

ダダダダダダ（全員が走りまわる音）

*

ぷっん・・・

ざわざわ……

「な、なに!？」

「きやああああ!？」

「なんだよ……」

電源が止まる音が全体に響いた。まだ外は明るいが、すぐに、電気が止まったのがわかった。

ぎゅっつ

「……」

茜が強く袖をにぎってきた。かなり怯えている。こういうのは本当に嫌いなのだろう。僕の傍から離れようとしなない。

「や、ヤバイよおお……あきらあ……」

「お、おいっ!？」

ぎゅううう……

腕にしがみついてきた!？な、なんだよ……そんなにくっつくなんて……

「うう……いやあ……」

「だ、だいじょうぶっ、だいじょうぶやけん……」

声がひきつってしまった。こんなに茜が近いと動揺するのか僕!？・

・お、落ち着け……まずは冷静になるんだ……

「な?だいじょうぶやろ?」

「う、うん……」

「よし」

「……」

「……」

「あきら？」

「なん？」

「て・・・」

「ん？」

「・・・手、つないで？」

「！！！！！！」

や、ヤバイヤバイ！！涙目で上目遣いでお願いされるとなんかヤバイ！！こんなに可愛いかったか？

「あ、ああ、いいぞ・・・」

「・・・」

ぎゅっ

「・・・」

「・・・」

こ、こんなときになにやってんだ僕！！なんで手つないでんだ？でも、すごく怖がっている茜を放っておくわけには・・・――

この瞬間、いつもの日常は終わった。

いまおもえば、強引にでも仲間を連れて逃げ出しておくべきだったのかもしれない。

これから始まる『こと』に逃れることができたかもしれないからだ。

すべてが、なにもかもが、たった一瞬で奪われた。

空からやってきた『彼ら』によって、僕らの知っている世界は

なくなつた。

戦争が、始まつたのだ

「……………」

静まり返った教室。他の教室からは、泣き叫ぶ女子の声や、恐怖で我を忘れて廊下にうずくまっている男子も見えた。

・・・ンタンタンタン

かかとを擦るような音が教室に近づいてくる。みんなは一瞬驚いた様子だったが、正体がわかると、それは治まった。

「全員、グラウンドに集合だ！！明るいうちにやらないと、暗くなり始めたら足元が見えなくなる！！いそいで！！」

担任の先生が現れた。先生は、素早く、適確な判断と指示を生徒に促した。僕は、先生のあとに続いてグラウンドに出た。

「出席番号順で並べ！！」

僕は指示に従った。辺りを見回すと、ぞくぞくと校舎から出てくる生徒の中に、なにがおきたのか分からずパニックになっている生徒と、落ち着いて行動する生徒が目につまった。このとき、たまに行われる避難訓練をおもいだした。真面目に避難訓練に参加する奴と、おもしろがってふざけている奴に普通分かれる。僕もどっちかというと、おもしろがってふざけている奴に分類される。あんなかったるいことに、真面目に取り組んだことは、たぶん一度もないし、そこまで真剣に取り組んでいる奴もそんなにいないだろう。でも、そこで真面目に取り組む奴は、クラスではかっこのいいじめの対象になるからだ。こういう場で『まじめくん』というあだ名が生まれ、彼は、一年間クラスの一部にいいじめをうける。そういう認識がみんなの中に根付いていたのだ。

しかし、いまこの状況は立場が逆転するのだ。いつも真面目に訓練を受けてきた奴と真面目にやらなかった奴との心の持ちようが。

いまの行動に表れているのだ。冷静でいられない生徒は、そのまま立ち尽くし、ぼくとしてる奴、先生の指示がまったく耳に届いてない奴、さらには、むしろこの体験したことのない状況にはしゃぎだす奴。人間という生き物は、こういうときに個々の性質が実際に使われるのだろうか。そんな彼等を横目で見ながらそんなことを考えた。

しかし、本当にこれで大丈夫なんだろうか。こんなことで、安全を確保できるのだろうか。というより、

教師ごときが、こんな状況でなにかできるのだろうか？

僕は、まるでいまからおきる『こと』を悟ったかのような疑問を抱いた……

いま考えると、それは当たり前のことだった。

……だって、そうじゃないか。防災訓練や避難訓練だって、『戦争』を想定しての訓練はなかった。いまさら戦争が始まっては生徒も教師もどうしていいかわからなくなるだろう。

だれも、戦争を経験したことがある奴なんて、ここにはいない。戦争とは、どのくらい恐ろしいのか、我々は、本やテレビでしか知ることではないから、『本当の戦争』を知らない。

整列が完了したと同時に、一人の教師が前にでて、理由を説明します。実際のところなにが起こったのかなんて、検討もつかない。どう説明すればいいか、前にいる教師は困っているようだった。「え〜、いま、ここに集まってもらったのは、みんなも知っているように突然の停電が起きたからだ。しかし、これはただの停電ではなく、電気供給そのものの停止によるものだとなりました」

いきなり規模が大きくなった。聞いているようだと、停電したのはここだけじゃないらしい。

キヨロ、キヨロ・・・

辺りを見ても、あまり分らない。まだ陽が傾いてないから、明かりをつけている家なんてない。実際に体感するのは、夜になってからだ。

「・・・ん？」

僕は、一台の自動車に目が止まった。ただの動いていない車だが、どこか様子がおかしい。他の道路を見ても、一台どころか、すべての車が止まっている・・・おかしい。僕は、あるひとつの謎を見つけてしまった。

停電で、自動車は止まるのか？

いまの僕には、わかるわけがなかった。ただ、普通の停電ではないことを除いては。

「・・・電力会社との連絡は？」

「そ、それが・・・」

「どうした？」

「携帯が、壊れてしまいました・・・」

「なにをしているんだ！つたくっ！」

カチカチッ、カコカコ・・・

「・・・」

「これは・・・どうということだ？」

「だれか、携帯が使える先生はおられますか？」

『・・・わたしも、だめです』

『お、俺のも・・・』

『わたしもだ・・・』

教師たちの動きがあわただしくなった。携帯を持ったまま走り回っている。どうしたのだろうか。

「あきらくん？」

「おつ、太田くんか？いきなりどうした？」

うしろからのそつと表れた。出席番号順に並んでるはずだから太田くんは前のはずなのに、なぜうしろから？

「磁場がいかれてるよ」

「えっ？」

自分の携帯をいじりながらつぶやく。

「・・・って、なぜ学校に携帯が！？」

「いまは、どうでもいいよ」

「いやいや、いまはいいかも知れんけど！？なに？いままでずっと持ってきてたの！？おもいつきり校則違反してたの！？」

「こんだけ大人しいと、なんにも疑われないよ」

「サイアクだよこの子。見た目は純白だけど、心はめっちゃめっちゃ腹黒いよ」

「そんなことよりさ」

「さらつと流すなよ！なに丸くおさめようとしてんの！？」

「この停電、直らないかもしれんね」

「・・・は？」

いきなりシリアスな展開にもっていくなあ・・・

「・・・どういうこと？」

「文字どつりの意味だよ。このままずっと、電気が止まったままかもってこと」

「・・・なんで、そう言いきれん？」

「だって、普通停電の影響を受けない自動車や携帯が壊れたんだよ？きつと、もつといろんなものが使えないかもしれない」

「……」
「す、すごい……僕が気づかなかったことをすべて知っているよ
うな言い方。」

太田くんは、どこまでわかるかな、
僕が出す問題に……

「……ねえ、太田くん」
「なに？」

僕は、心の中に抑えていたことをたずねた。

「……いまから、なにがある？」

「……」

「今日の空港襲撃となにか関係ある？」

「……それは……わからないよ……」

「……そ、そーか」

「でも」

「！」

「近い将来、もしかすると――」

「え？」

*

福岡県玄海灘――

現在、海上自衛隊による警戒態勢がとられている。

海上自衛隊護衛艦「よすが」――

「・・・どうかね・・・」

「良好です。電磁パルスの影響もさほど受けていません」

「よし。レーダーの反応は？」

「警戒機によると、レーダーにそれらしきものは写っていません」

「そうか・・・」

「・・・攻めてきますかね？」

「まだわからんよ、以外と腰がひけてしまってるかもしれん」

「・・・だと、いいんですけど」

「もし攻めてきても、迎撃する準備は整ってる。１ミリでも日本の領海に侵入したら、容赦しないよ」

ヴーーン、ヴーーン・・・

「なにごと？」

『旋回中の偵察機より入電、北東、午後２時の方向に、多数の未確認飛行物体接近中！』

「数は？」

『把握されてません。高度４０００、到達時刻は２０分後！！』

「は、早すぎる・・・」

「いますぐ戦闘配置につけ！！くるぞ！！」

『全隊員に告ぐ、ただちに戦闘配置につけ、目標は高度４０００、数は把握されていない、総員、迎撃準備』

・・・ビビビ、ザアーーーー・・・

「どうした？」

「強力な電磁場です！！モニターの映像が途絶えました！」

「敵の位置も見失いました！目標をとらえることができません！！」

「なにか生きてるものはないのか！？」

「だめです！！艦内すべての通信機能がいかれました！！つつ！？

この船も制御不能です！！」

「くっ……」

ドンツッ！！

「なにものなんだ……奴らは……」

「敵の集団を、肉眼で発見しました！！」

「くそっ……なにもできず、見送るだけか……」

「上空に到達します！！」

ヴウーーーーー

「このままじゃ、上陸されますよ！？」

「……くそが……」

午後4時47分、敵国九州北部上陸

*

グラウンドに集まってから1時間弱が経過した。静寂に包まれる学校周辺が、逆に気味悪く感じる。

「はぁ……いつまでこのまんなんだよ……」

卓斗がつぶやく。いつのまにか列はバラバラになり、互いに恐怖に怯え、身を寄せ合ってる生徒が増えてきていた。茜と立華さんも合流し、いつものメンバーで話合った。

なにがあっても、一緒にいると・・・

「なあ瑛？もう帰りたくね？」

「同じく。ずっと座つとーけん、ケツが痛い」

「・・・」

茜は、ずっと黙っていた。当たり前か、ずっと怖がっていたからな。

「・・・茜？大丈夫や？」

「・・・うん」

「立華さんも、気分悪かったら言つてよ？」

「は、はい・・・ありがとうございます・・・」

ひゅ~~~~う・・・

しかし、本当に静かだ。車やバイクが動いてないと、こんなにしんとするのか。さっきまで騒いでいた奴らも、いまは大人しくしているようだ。まだ、女子のすすり泣きがあちらこちらで聞こえてくる。

「・・・おっ？先生どもがなんか話ようよ？」

「ん？」

『・・・れでいいですね・・・よし・・・』

ひとりの教師が前に出てきた。なにか報告があるようだ。ここは、静かに聞こう。

「・・・え~~~~、話し合いの結果を報告します。現在4時50分です。遅くなると危険ですので、ただいまより下校を始めます。荷物はそのままで、帰る方向別にわかれてください」

通常なら、喜ぶところだろうが、いまは素直に喜べない。いまの

状況より酷い『あいつ』がいるだろうから。ここにいる方が個人的にいいけど、ここは、集団の場だ、みんなと共に行動しよう。

「よしっ行くかみんなー!!」

卓斗が張り切って立ち上がった。きつと、落ち込んでるみんなを元気づけようと、こいつなりに考えているんだろう。

「おう」

「は、はい」

「………」

そのあとに続く僕と太田くん、立華さん。茜は下を向いたまま歩いている。なんかひとりだと危ない気がする。

「茜、帰るぞ?」

「……うん」

「………」

やっぱり心配だ。

ガシッ

「……え?」

「行くぞ」

「あ、……うん」

しっかりと手をつないだ。小さい手が小刻みに震えているのがわかった。僕は、みんなとはぐれないようにについていった。

*

「………」

通学路が同じ人と並んで下校する。卓斗、太田くん、茜、立華さん、いつものメンバーで帰るのが楽しみだった。何気ない会話と絶えない笑い声に包まれながら帰路を歩くのが、当たり前になっていた。

でも、いまはそんな時間は流れていない。だれも表情を変えず、かつて体験したことのない『戦争』を自分の身をもって感じていた。

「・・・じゃあ、俺こっちな」

「僕はこっち・・・」

「わ、わたしもです・・・」

そして別れ道。ここでみんなとお別れ。この瞬間が一番嫌いだ。ひとりになるから。

「・・・」

茜ともここで別れることになるが・・・ちゃんと帰れるのか？

「・・・茜？じゃあな」

「・・・うん」

「なんかあつたら連絡な」

「うん」

「・・・バイバイ」

「バイバイ・・・」

卓斗と茜、太田くんと立華さん、このペアで別れていく。僕だけ違う道。なんか取り残された感じがする。

「・・・やだなあ・・・」

ひゅ~~~~うう・・・

風が吹き抜けた。僕は空を見上げた。陽も傾きかけ、きれいな茜色に染まっていた。

ここから僕は、たぶん一生、この目に焼き付けることになる惨劇を目の当たりにする

「・・・ん？」

当時の僕は、はるか上空に見え隠れする『もの』を、目を凝らして見つめていた。その見たことのない『もの』を、しばらく夢中になって見ていたのだ。遠くの空に無数の光る物体。たまに、チカチカ点滅しなげらずと同じ方向に向かって飛んでいた。

ただ、その物体から放たれる小さな黒いなにか。それに気づくまでは、まだ僕は『ここ』にいたのかもしれない。いつもの日常、いつものクラスメイト、いつもの学校、いつもの風景。僕の知っているこの世は、そんな小さなもので成り立っている。本当に、ちっぽけだ。あんな『もの』に、一瞬で消されてしまったのだから。

空の物体から落ちてくる小さな『もの』は、やがて、風にあおられて広範囲に広がっていく。

それは、まるで、ここに立っている僕を避けていくように散らばり……

周りに、着弾した。

360度の大パノラマに、炎の海が写っていた――

ACT・6 現状確認セヨ（後書き）

読んでいただきありがとうございます！！

感想を一言お願いします！！

ACT・7 やるべきこと

「・・・ハア・・・ハア・・・」

僕は走った。一心不乱に、無我夢中で走った。目的はただひとつ。

「・・・みんな・・・」

一体なにが起きてる？なにが始まった？頭の中が、疑問符で溢れている。と同時に、いま起きていることを理解しようと、頭の中を整理する。でも、考えれば考えるほど、混乱する。自分で冷静でいられてないのがわかる。

僕は、『もの』が降り注ぐ中懸命に走り続けた。たぶん、家に戻っても、学校に行っても、助かるとは思えない。まずは、みんなと合流するために片っ端からそれぞれの自宅を回った。当然、無事な家なんてなかった。僕は、逃げ惑う人々に逆らいながら、みんなを探した。

この降り注ぐ鉄の雨の中を、生きていられることができたのは、たぶん、奇跡だろう。一面炎があがっているこの街に、みんなを探して走り回ったが、命に関わることはなかった。というより、よく死ななかったと思う。周りのことなんてお構いなしでいたから、恐怖や危険を感じることがなかったのだ。

僕は、炎の中を、しばらく駆け回った――

*

どれだけ歩いただろう。いつの間にか、走るのをやめ、途方に暮れながら、とぼとぼ歩いた。遠くの方では、爆音や燃え盛る建物が見え、空には、異様な形をした物体が飛び回っている。たまに、そこからなにか落したり、急に急降下しながらある一カ所を集中し

て攻撃したりと、まるで、映画のワンシーンのようだ。縦横無尽に飛び回る物体、戦闘機じゃないなにかは、この辺りを掃射したあと、どこか遠くに行った。その飛んでいく物体の真下は瞬時に炎に包まれた。

僕は、一瞬のうちに灰と化した道を歩いた。目を道端に向けると、全身黒こげになった人や、下半身がない死体が転がっていた。その見たくないものから目を逸らし前を向くと、胴体から飛び出てる内臓を引きずりながら歩いてくる人を直視してしまった。ズルズルと音をたてながら、こちらに近づいてくる。

「・・・うつ・・・」

なにかが焼ける臭いと、血生ぐさい臭い。おもわず鼻を押さえたが、その強烈な血臭に耐えられなくなった僕は、この場所を離れた。

*

ついに学校まで戻ってきた。ひどく荒れていた。グラウンドの地面はえぐれて大きな穴ができていた。校舎も、元の姿を忘れさせるような無残な有様だった

引き続き茜や卓斗を探すが、周りは人の気配すらない。壊れた家の中から、悲鳴や助けを求める声が聞こえるが、いまの僕になにが出来る？その場に行つたとしても、瓦礫に埋もれている人を出してやる技術や道具はない。むしろ、巻き込まれてしまうかもしれない。いまの僕に、他人を助けるという考えは浮かばなかった。自分が生きるのに精一杯だったのだ。無駄に体力を使うようなことはしたくない。僕は、しーんとした道を、ひたすら歩いた。

その結果、さまざまな『もの』を目にした。腕の皮膚が破れ、肉がただれている人。頭の一部がちぎれ、中の脳がむき出しになっている小さな赤ん坊を抱いたまま力尽きた母親。親とはぐれたのか、泣き叫ぶ子供。

まるで、地獄だ。この世の終わりを感ぜさせる光景が広がってい

る。この状況を見て、やっと僕の中の感情が込み上げてきた。

「・・・た、卓斗お・・・、茜え・・・」

みんなの顔が思い浮かぶ。その瞬間、押さえ込んでいたものが一気に爆発した。

「うわあああああつ！！ああつ、あああああああ！！」

すべてをさらけ出した。僕は、怯えていたのだ。いきなり始まった攻撃に、一瞬で行き場を無くした僕は、ひとり、灰色の空に叫び続けた――

*

夜になった。季節は12月だろう。日中でも15度を上回っていた昼と比べて、夜は急激に気温が下がる。さすがにこのままではまずい。どこか暖がとれる場所に行きたいが、電灯の明かりがないため、足元がまったく見えない。たぶんいま行動したら、危険だろう。なんとかして寒さに耐えよう。

「・・・・・・・・」

僕は、その場に寝転んだ。空を見上げても、星は見えない。曇っているのだろうか。

「・・・・・・・・う〜〜、くさあ〜〜」

腐肉の臭いがする。死んだ人間の方から、激烈な臭いがする。こんなところで寝たくはないが、じっとしているほうが安全な気がする。ここで、夜明けを待つことにした。もしかしたら、助けが来るかもしれない。僅かの可能性を信じて、今日は、休むことひしよう

・・・・・・・・

『・・・・・・・・い・・・おい、・・・きら・・・』

「・・・・・・・・ん〜〜？」

『おい瑛！起きろ！！』

「・・・あ？」

なんだ？人が気持ちよく寝てるのに・・・というか、この状況、前にもあったような・・・

『・・・あきら？起きんと？』

今度は女性の声がする・・・なんかどれも聞いたことがある声だ。

『瑛あ！！』

『あきらあ！！』

なんなんだ一体・・・そろそろしつこい・・・

『瑛あ！！』

『あきらつてばあ！！』

あゝくそっ！！うるせえ！！・・・どっか行けよ・・・どっか行け！！

『・・・死ぬよ・・・』

・・・は？――

・・・

「・・・はっ！！」

「なっ・・・！！」

なんだ？・・・なんだ今の・・・

「く、くそがあー！！死んでしまえ！！」

「うっ」

ガキン！！

なんだこの男・・・いきなり包丁突き刺してきやがった・・・危機一髪でかわした。あぶねえ

「・・・っ！！くそっ、このやろっ！！」

「はっ、・・・はっ、・・・」

寝起きに急に動いたから、頭がグラグラする。視界が狭い・・・

「と、取れねえっ！！」

包丁は、民家の壁に突き刺さり、抜けなくなっているようだ。

「おらっ、おらっ、・・・くそっ！！くそっ！！」

なにがなんだかわからない。なんでこいつは包丁を持っている？
なんで僕を襲ってきた？わけがわからない・・・

・・・ザクッ、（包丁が抜ける音）

「はっ、・・・」

「へ、へへへ、」

男は不気味な笑みを浮かべながら、こちらを向いた。こいつ・・・
壊れてるっ！！

「しねえええ！！！！」

「・・・くっ」

とつさに横にかわした。奴は包丁を振り回している。どうする？
逃げるか？それとも・・・

「うおらあああ！！！！」

「くそっ」

ガシッ

ギリギリで男の手首を掴んだ。目の前に包丁がある。や、やばい・・・
殺される・・・

「・・・な、なんやお前、壊れとうとや？」

「壊れとう？バカやねえとや！！当たり前やろ！！こんな状況で冷静でおれるわけなかるもん！！」

狂っていた。男は、我を忘れていた。

ググググッ・・・

「・・・うつ」

「ひやははは！なんや？おらっ、おらっ、ぶっ殺すぞ！！」

お、押される・・・くそっ、こんなところで・・・し、死ぬのか・
・いやだ・・・まだ、死ねねえよ！！

「おらぁ！！」

「おわっ！！」

どさっ

男を押し返した。男は、うしろに倒れた。

いまだ！！

「んっっ！！」

男の腹の上に乗った。形勢逆転。包丁を奪い、完全に主導権を握った。

「くそやろ！！ぶっ殺してやる！！」

「や、やめろ・・・やめてくれ・・・」

「うああああああっっっ！！！！」

ピタッ、

「・・・」

「・・・ヒ、ヒイイ・・・」

僕は躊躇った。なぜかはわからない。けど、止まった。男の顔面すれすれで気づいた。

なにをしてるんだ？おれ？

「うつ、．．．うつ．．．」
「．．．．．」

ガシャン．．．

包丁を投げ捨てた。

「．．．．．」

「．．．お前、なんで殺らねんだ．．．」

「．．．ちがう．．．」

「．．．あ？」

「違うんだ！！僕のやらんといかんのは、こんな事やないっ！！」

「．．．．．」

「なんで．．．こんな、こんな事に．．．」

「お、おい．．．いいかげん降りてくれん？」

「．．．ハッ、」

「．．．．．」

ザッ、

「す、すみませんでした．．．」

「い、いや．．．悪かった、俺も」

「．．．．．」

「なあ」

「？」

「どーなつとーと？」

「．．．．．」

「．．．俺さ、目の前で家族が死んで、おかしくなつとつた。だつて、信じれんかったけん。こんな簡単に家族奪われてさ、俺だけ生き残って．．．おふくろやおやじ、弟を守れんかった。情けなか」
「．．．．．」

男は、話した。自分があってきたことを。僕は、黙って聞いた。
「・・・ぼ、僕も――」

ヴウウン・・・ヴウンヴウン・・・

「？」

「あ？なんだ？」

遠くからバイクの音が聞こえてくる。しかも、音がだんだん大きくなってくる。こっちに近づいているのはすぐわかった。

「くそやろう！―こんなんでも走りようや・・・」

「え？」

「おい、離れたがいい」

「なにが？」

「族が来よつたい！―」

「っ！―」

「逃げるぞ！―あんな大勢相手にできん」

「・・・」

「ほらっ」

「・・・あつ・・・」

「おいっ！―急げつて！―」

「あ、あれ・・・」

なんか変・・・足に力が入らない。

「・・・」

「・・・くそがつ」

ザッ

「？」

「お前、絶対逃げきれよ・・・やられんなよ・・・」

「は、はい？」

「・・・生きるよ・・・」

「・・・・・・・・」

ヴウウウン、ヴウン~~~~ヴウウウン！

「へ、かつこいいかな・・・俺」

「ちょ、ちよつと・・・」

「おらああああ！！！！止まれやああ！！！！」

男は大きな声をあげた。彼の前からは、バイクの音とライトが大きくなりながら、やがて、目の前に止まった。

「あ？なんだおっさん」

「へ、こんな世の中だ、ひと暴れしたくてなあ」

「なんだ？なめてんのか？」

「おう、なめてるよ。お前ら——」

「——弱そうだから」

「ぶつ殺す！！」

「『おらあああああ』」

「後悔すんなよガキどもがあ！！」

「・・・え？」

僕はようやく理解した。なぜあの男が『生きる』と言ったのか。『逃げる』と言ったのか。自分が犠牲になるってことかよ・・・バカじゃねえの？勝てるわけないじゃん、あんな数相手に。あいつら、バットとかいっぱい持ってんのに、あいつ、なんも持っていないじゃ

ん。ぜってーやられる・・・
なのに・・・

「・・・・・・・・（ニコッ）」

あいつ、笑ってる・・・あんなにやられてんに・・・めっちゃ
殴られてんに・・・なんで笑えるんだよ・・・

「・・・・・・・・ありがとうございますっ・・・」

僕は、深く、深く、頭を下げた。

「・・・・・・・・はやく行けえええ！！！」

「・・・・・・・・くっ」

ダッッ

「・・・・・・・・へへ・・・行きやがったか・・・」

「おらあ、どこ見てんだ、よっ」

グシヤ、

「うわああああ！！！！目が、目があああつつ」

「はははははは！！！！」

「ぐつちやぐちやにしてやる・・・」

「おらあああ！！！」

「ぐああああああ！！！！い、痛い、痛いいい・・・」

「なんだ？お前、死にそうじゃね？はははは、やべえ、うける、バ
リうける！！！」

ザクッザクッザクッザクッザクッ・・・

ACT・8 The days that are over

「・・・つ、疲れた・・・」

そんなに走ってないのに、息切れがすごい。肺が焼けるように熱い。酸素を取り込もうとする度、喉が乾く。口の中はネバネバして、水分がまったくない。

「・・・どこかな・・・ここ・・・」

逃げるのに必死で、どこに向かって走っているのかなんて考えてなかった。たぶん、知ってる場所だろうけど、目立つ建物はすべて壊された。周りは真っ暗で、天気は曇っているから、ほんとになにも見えない。おかげで、方向感覚もおかしくなった。もう、後戻りはできない・・・

ヴウウウウンン・・・

「・・・はっ・・・」

とつさにその場に伏せた。なにが近づいて来ているかわかったからだ。

「・・・くそ、楽しそうに飛び回りやがって・・・」

あいつらだ・・・一瞬でこの街を廃墟にしたもの。不気味な轟音を響かせ、異様な形を披露しているかのように見える。

「・・・ふう、行っただか」

異様な物体は、その黒光りするボディを輝かせながら、飛んで行った。

「・・・あああ」

しばらく伏せていたが、『あれ』もどっか行っただし、ここには誰もいないようだ。今度こそ、眠ろう。あんまり寝れないだろうけど・・・

「・・・」

明日・・・どうしよう。友達を探しているのに・・・なんで、あんな目に会った・・・これから協力して行動できるかもって思ってた人を手につけ、妙な『もの』から逃げるのも疲れた。しかも、身体が痛いの。気づかない間に、いろんなところを怪我した。服もボロボロ・・・あつ、そうか・・・制服のままだった・・・サイアクだよ・・・さすがに、この格好で茜や卓斗に会いたくないな。・・・膝破れてるし・・・

「・・・大丈夫かなあ・・・」

あいつらのことを考えると、急に心配になった。・・・卓斗、茜、太田くん、立華さん・・・みんなの顔が浮かぶ。まだ、一日もたつてないのに、みんなに会いたい・・・

「どこいったんだよ・・・みんな・・・」

*

そんな抑えきれない弱音にすら浸らせてくれない『奴ら』。あの後も、幾度となく上空を徘徊し、そのたびに逃げ惑っていた。まるで、自分達の庭のように、時折、逃げ惑う人々を虫のように、掃射しながら。僕は、遠くから響く悲鳴を、横耳で聞きながら走った。込み上げてくる怒りと、憎しみを、どこにぶつければいい？心の底から、湧いてくるこの気持ち、僕の冷静さを奪っていく。泣きたくなる。自分が育ったこの街が、壊されていく。マトモでいられるわけがなかった。

ガッツ！！

「うわっ！？」

ズザッ・・・

なにもないところでこけた。その瞬間、自分の不甲斐なさに腹が立った。『なにやってんだ・・・』『なにやってんだよ・・・』同じ言葉を、心の中で繰り返した。目の前が真っ白になる。マンガみたいなへばいこけ方しやがって・・・情けない・・・

キュルキュルキュルキュル・・・

「・・・なんだ？」

すごい地響きと、チェーンの回る音が、交差点の方から聞こえてきた。なんとなく、それは、助けが来たんだとわかった。

『生存者確認！！保護しろ！！』

キューーン・・・

「こちら前線部隊、要救助者を確認した」

「・・・あ、・・・あ・・・」

なぜだろう、言葉が出ない。颯爽と現れた戦車から、大人2、3人が駆け寄ってきた。ひとりは、僕に毛布を被せ、もうひとりは、酸素マスクらしきものを、僕の口にあてた。後からやってきたジープに乗せられ、わけもわからぬまま連れて行かれた。でも、すぐに理解できた。

・・・助かった・・・

全身の力が抜けた。

「大丈夫かい？」

「・・・は、はあ・・・」

「今、安全な場所に向かっているからね」

「・・・」

「・・・大丈夫か？しつかりしろ？」

「あ、あの」

「ん？」

「なんで自衛隊がここに？近くに駐屯地なんか無いのに」

「場所なんて関係ないよ。我々は、命令されてここに来た」

「じゃ、じゃあ、なんで・・・」

「ん？」

「なんで、防げんかったと？」

「・・・」

「あんたらなら、わかったっちゃないと？」

「・・・」

「迎え撃つことぐらいできたやろ？みんなに知らせることぐらいできたはずやろ？」

「それは・・・」

「国民を守ることが！あんたらの仕事じゃなかと！！皆殺しにされて、どうするとよ・・・」

勝手に口が動いていた。なんでこんなこと言ったのかわからない。でも、今まで見てきた光景を思い返せば、思い返すほど、この、『無能』なやつらに、自分が味わってきた苦しみ、痛み、悲惨さを、思い知らせてやりたかった。だから、こうして動いている車の中で付き添っていた隊員の胸倉を掴んでいる。こいつに、いままでのストレスをすべてぶつけた。

「なんで攻撃せんとか？なんでなんもせんとか？」

「きみ、ちよっと・・・」

「はやく！はやくなんとかしろよお！！」

「・・・」

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「わかった。きみの言いたいことは、それで全部か？」

「・・・は？」

「終わったなら、どいてくれるか」

「っ！ー！くそっ！ー！」

ガシッ

「・・・」

「ふう、ひとつ教えてやろう、少年」

「なっ・・・」

ググググッ・・・

「うつ・・・」

拳が、隊員の片手でねじられていく。

「お前の言いたいことはわかった。そりゃ誰だってそう思うだろうな」

「・・・」

「でもな、俺たちは何もしないじゃない。なにもしないんだ」

「・・・どういうこと・・・だよ」

「・・・本当は、一般民に公開しちゃだめっていわれてんだけど、話してやる」

「・・・」

「やつらは、人じゃない」

「・・・え？」

いきなりの飛びすぎた話に、混乱した。

「・・・じゃあ、あれか？宇宙人が『あれ』を動かして、侵略しに来たってこと？」

「はあ・・・なんでそうなる」

「え？」

「そんなんじゃない」

「じゃあ、なに？」

「やつらも、元は人間だったんだろう。なにかがあつて、人間じゃなくなった。それだけだ」

「・・・い、意味わからんし！ていうか、なんでそんなことわかる？」

「・・・見たからだよ」

「・・・」

「筑後地方に配備されていた部隊が、やつらとの交戦中に、相手の一機を打ち落とした。しかし、墜落したはずのそこから爆発音がま続たくなかった。不審に思った隊員は確認に行つたんだろう。そこで見たものを本部に伝え、それが俺達にも伝わってきた」

「なんて？・・・」

「『ひとじゃ、ない』つてな」

「なんだよ・・・それだけ？」

「なんせ、見たのはそいっただけだからな。一体なにを見たのかはわからない。でも、それを決定づけるものが発見された」

「・・・」

「ひとりいないことに気づいた隊員のひとりが――」

「――内臓をすべてひきずり出された隊員の遺体を見つけたんだ」

「うつ・・・」

このあいだ見たのを、一瞬思い出した。

「その写真を見たが、とても人が出来るようなことじゃなかった。中の骨まで全部なかった。残つてたのは、皮膚だけだった」

「・・・」

「・・・その写真が、筑後班との最期のやり取りになつちまった・・・」

」

「・・・それって」

「ああ、全滅だよ。その記録が回ってきたが、今でも信じられない」
「・・・」

「あの飛び回ってるやつから、なにかが発射された。青白い光でなにも見えなかったが、そのあと写っていたのは、焼き尽くされた街だった」

それが、もし本当なら、今近くにいる『あれ』から、離れなければならぬ。ここにいたら、ぜったい死ぬ。明らかにヤバくなってきたな・・・

でも、僕が今、一番やらなくちゃいけない事、このまま安全な場所に連れて行かれたら、これまで逃げ惑い、死にもぐるいでみんなを探して、いろんなものが目に焼き付けられて、これ以上ない苦痛と悲しみに耐えてきたのが、すべて報われないままになってしまふ。そんなの御免だ。なんで、僕だけ助かってんだ・・・こんなのないよ・・・冗談じゃないって・・・

「・・・あの」

「なんだ、まだなんかあんの？」

「・・・みんな・・・」

「ん？」

「みんな、どこに、いったんですか・・・」
「・・・」

「他に、助かった人はいるんですか？」

「・・・我々が、ここに来て、最初に救出したのが、お前だ・・・」

「そ、そんな・・・」

「それに・・・俺が言うのもあれなんだが・・・生きてたやつなんてどこにも――」

ドガー――ンッッッ！！！！

「っ!!」

「なんだっ!!」

「上空に飛行物体接近!! 攻撃をつけました!!」

「戦線はなにをしてる!!」

「それが、通信が途絶えました!」

「くそっ!」

「.....」

突然の襲撃。助けられて、少し安心していた僕にとっては、不意打ちだった。尚も走り続ける車、ふと外を見た僕は、目の前で繰り広げられる光景に恐怖を感じた。なぜだろう、さっきまであの真下で走り回っていたのに。全然、なんともなかったのに。僕は、どうしてこんなに怯えているのだろう。震えが止まらない。頭がひどく痛い。めまいもするし、吐き気もする。一度に訪れるストレスとプレッシャーで、ろくに身体に力が入らない。車が揺れる度、倒れそうになった。最終的に、隣にいた隊員の方に倒れこんでしまった。

これが、普通の反応なのだろう。周りにろくな大人がいなかった僕は、すべてをこの隊員に預けてしまっていた。

そう、僕は子供で、この人は大人。こんなにも頼れる人がそばにいることがうれしいのか。僕は、弱りきってしまった。もう、さっきみたいに全力で走ることも、自分の感情をさらけ出すことも、しばらくは出来そうにない。

薄れゆく意識の中。写るのは、殺戮を繰り返す『もの』と、それに立ち向かう自衛隊。無意識に考えついたことは、ただひとつ。

勝てるわけが、ないということ。

うすうす感じ始めていたこの結末は、たぶん、確信へと変わった。みんなが見つからなくなってきたときから、ずっと芽生えはじめていたこの予想が、どうやら当たってしまうようだ。

ようやく理解したわけだ。もう、本当に、いままで過ごしてきた日々は、終わってしまったということと、僕は――

もう、どこにも帰る場所が、なくなってしまったということとを

ACT・8 The days that are over(後書き)

遅れてすみません!!

8話です ぜひ感想ください!!

僕は、深く眠ってしまっているようだ。たぶん、非難場所に到着しただろう。でも、目が覚めなかった。周りから見ればきっと、死人のように見えただろうか。

目が覚めたのは、翌日。敷布団に寝かされていた。起きた瞬間に、体中に激痛が走った。誰かが手当てをしてくれたんだろう、包帯や絆創膏が、あちこちに貼られていた。

しばらくして、様子を見に来た女の人に訊ねた。もちろんみんなの安否だ。こんなに大きな避難所なら、みんなここに来ているかもしれない。だから訊ねた。なのに、僕に突きつけられた現実は、あまりにも残酷で、受け入れがたいものだった。

すでに身元が取れている、僕と同世代ごろの人の名前や住所が記載された名簿を渡され、自分で確認するように言われ、上から順に見ていった。しばらく黙視したが、みんなの名前は無かった。僕は、その人に、友人の名前を言い、調べてもらうように頼んだ。まだ、身元がわからない人もたくさんいるとのこと。確認が取れ次第、報告してもらうことになった。

まだ、希望はある。死んだわけじゃない。確認できてないだけなんだ。絶対生きてる。そんな簡単に死ぬはずがない。だって、卓斗だぞ？ あんなしぶといやつがやられるわけがないじゃんか。茜も、みんなと逃げ延びたはず。太田くんや立華さんも、頭を働かせて、なんとか逃げてるはずだ。大丈夫・・・大丈夫だ。みんな戻ってくる。またみんなで、集まって、笑えるよな。また、一緒に帰れるよな・・・

報告が来たのは、3日後。

運び込まれた、原型を留めていない20人ほどの遺体の中に、

4人の、血まみれの遺体が、虚しく、並んで、横たわっていた――

*

いまから語られることは、『当たり前の日常』が終わってしまう、少し前の話。

そう、まだ『当たり前の日常』を謳歌していたころ。学校が（勉強以外は・・・）楽しくて、仲間という時間がなによりも幸せだった。それが、一瞬で奪われることになるなんて、誰も予期していなかった。だからこそ、ああして過ごすことができたのだろう。

ずっと続くと想っていた、笑い合ったり、ふざけ合ったり、一緒に帰宅したりすることが、そんな些細なことが、できなくなってしまう。いまは、後悔の念にかられている。もっと、やりたいことも、ほしい物もあった。もちろん、恋愛もやってみたかった。僕だって、好きな人はいた。いつか声を掛けてみようと思っていたけど、そんな簡単にいけたら苦労しない。ずっと、片思いのまま、学園生活を送っていた。いま想うと、もったいないことをした。こうなることが、分かっていたのなら、積極的に話掛けたり、告白だってできた・・・かもしれない。

そんな未練がたくさん残ったまま、みんなと死に別れ、想いを伝えられないまま死んでしまった、いや、生きていると信じてる。心の底から。でも、頭から離れないみんなの顔。蘇ってくるみんなとの時間。そのひとつひとつが、かけがえのないものへと変わっていく。戻ってこない空白の日々。でも、確かにあったんだ。忘れられないものが。

僕らの、日常が――

＊

『ほほえみ〜かわして〜かた〜り〜あい〜おちばを〜ふ〜んで
あ〜るいたね〜なみきの〜いちようも〜』

10月31日。まだ残暑が厳しいこの頃、2学期の頭から全クラスが練習してきた合唱コンクールも、ようやく幕を閉じようとしていた。学校行事となると、周辺地域の人もたくさん集まるものだ。体育館で行われていたこの合唱コン、ただでさえ全生徒と職員が入るだけでむさ苦しいのに、さらに、ギャラリーが増えることで、今の季節では考えられないほどジメジメする。そんな状況の中、丸一日かけてのプログラムは予定より速く進み、今歌っているのは、最終プログラムの全校合唱である。

『あたらしくいぼくらの〜ゆめ〜の〜せかいを〜』

・・・・・・

『閉式通告。これもちまして、第34回合唱コンクールを終了します。一同、礼』

・・・・・・

『着席してください。1年生から退場します。1組と2組は――』

放送部のアナウンスで、退場指導が始まった。

「・・・・・・はあ〜」

僕の隣にいた杉田が、息を吐きながら、ん〜と背伸びをした。

「おい、杉田？お前音外しすぎ」

「はあ？そんなことないし！めっちゃ上手かったやんか！超美声やつたし」

「己の耳は飾り耳か。お前のその歌声が、最悪のコーラスになって、

せつかくの合唱が絶望のカーニバルになつてた」

「ひ、ひどいわ瑛クン・・・最低よ!・・・うう・・・」

「よしよし、俺がメツてしてやるからな?」

横に座っていた酒井にすがりつく杉田。

「けっ、劇団ひまわりがっ」

「・・・ねーねー、立岡あ?」

「なん?」

酒井が声をかけてきた。

「今日、何時に帰れるとお?」

「んっ、まだ5時間目終わってないけん・・・いつもより速いっぢゃない?」

「ふっん、なんか行事がある日って、時制狂わん?」

「思つた、変な感じする」

「ラッキーやん」

「・・・」

少なくとも、僕以外は嬉しいだろう。学校が速く終わるってことは、家に帰るのが速くなるということ。イコール、自分の居場所がなくなるということだ。できることなら、ずっと、ここにいたい。できることなら、勉強はしたくないけど。

『3年1組と2組は退場してください』

アナウンスが入った。

『やっと帰れる・・・』

『なんで3年があとやって・・・』

ザワザワ・・・

みんな同時にしゃべりだす。最初のうちは、並んで教室に戻っていたが、先生の目が届かなくなると、それぞれ仲の良い友達と自然に合流していった。

「やっとなつた」

「卓斗、お前歌ってなかったろ？」

「俺が歌うと美しすぎて、みんな昇天するけん」

「あっそ」

どうせ、面倒だからだろう。

「アーキラ！やっ解放されたね」

「おー茜、指揮ずれまくったね」

実は指揮者だった茜。

「だって、バリバリキンチョーしたとよ？」

「顔真つ赤やったもんね」

「はあ〜？どんだけ見とうと？変態やん」

「意味分からんし、こっちは歌う方やけん、仕方なく茜を見よったと」

「ふ〜ん、で、どうやった？茜上手かった？」

「ピアノとリズム合っていないし右手と左手がバラバラやし早くなったり遅くなったりしよったし背低いしぺったんこやしまるでぬりかべのようなむ——ねって人が感想言いよるのになぜか右腕

の肘辺りから肩にかけて異次元の激痛がああ！！」

「途中から違う感想言い始めて一番人が気にしとる『部分』を丁寧に説明されたのに、まだこの程度よ？よかったね〜」

「バ、バ力な！？これ以上の痛みは、生命に関わるうう——いだああい〜」

「なに勝手に口を開いているの？あなたにできることはひとつだけのはずよ？」

「ぐっ・・・しゃべり方が棒読みになってる・・・かなりヤバ——

——

「まあ奇遇ね、こんなところに画びようがあるわ」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい——」

「はやく茜を楽しませなさい、この画びようがあなたの爪の間に突き刺さる前に」

「ん~~~~・・・（はっ、よし、これだ・・・）」

「今日の僕はいつもと違うぜ、気をつけな」

「……………（にこつ）」

おつ、笑ってる、許してもらえたかな？

「死ねや愚か者おお！！！！」

「うつぎややややああああ！！！！」

＊

翌朝、教室にて。

「……………なあ……………おい、シカト？」

「……………」

「……………もおゝ茜さん？」

「あ、漣、おはよー」

「おい、聞けや。堂々と無視すんな」

「おはよう、茜ちゃん」

静かに登校してきた立華さん。相変わらず、時間ギリギリになつて来る人だ。その学力の裏には、驚くほどマイペースな一面を携えているのだ。この絵に描いたような天然っぷりが、みんなには人気があるようなのだが……………

「おはよ、立華さん」

「おはようございます、立岡くん。奇遇ですねえ」

「ん？ああ……………」

「奇遇」の使い方違うし……………学力全然生かされてないじゃん。

「漣？誰と話してるの？」

「どう見ても僕だ———」

「あ、ほんとだ……………誰と話してたかな？」

「おいそこ、乗っかな」

「なんだか怖いわ。とても懐かしい人がいる感じがするけど、たしかその人は、昨日死んだはずだったんだけど・・・」

「なに勝手に過去の人にしようとしてんの！？ここにいてるんだけど。まだ死んでないんですけど」

「亡くなられたのかな？」

「おいしい！！今言っただじゃん！こんなに近くににいるのに、なんにも伝わってないし！！」

「もうすぐチャイム鳴るよ、席付きい」

「うん」

「うん・・・って、くそお！、全部流された！てめえ、コンクリートに埋めるぞコノヤロオ！！」

キンコンカーンコー・・・

「ヤバッ」

小走りで自分の席に戻る。結局、昨日のこと許してくれなかった。なんでそこまで怒るかな？まあ、席は隣だし、いつでもいいか。タイムイングを見計らって、素直に謝ろう。

ガラァ・・・

担任の小山田先生が、生徒名簿を片手に教室に入ってきた。ここ常葉中学校には、毎朝のホームルームがあるのだが、その長さが先生ひとりひとり違う。この小山田先生は、とにかく話が長い。今日の予定や日直を決めるのは当たり前だが、だんだん話の主旨からずれていき、最終的に、先生自身の昨夜の出来事など本当にどこでもいいことを、「よくまあ熱心に語りますなあ」と言いたくなるくらいにしゃべり続けるのだ。不運にもこのクラスになって7ヶ月。毎朝毎朝繰り広げられる、「小山田講演会」に、最近では、先生の私物を自宅か

ら持参してくるようになったからもうたまったもんじゃない。おもいつきり寝てやるわ、このクソが！

「えゝ、合唱コンも終わってゝ、気が抜けたとはおもうけどあゝもうすぐゝ期末テストがあります」

『あゝゝゝゝゝゝ』

『そうやったゝゝ』

『ヤバゝゝ』

ざわざわゝゝゝ

「はあゝい静かにゝ。今月の28、29日の2日だからゝみんなしつかり勉強するようにゝ」

11月になった今日。丁度1ヶ月ある。まだ楽勝かなゝゝゝ

「ゝゝゝゝゝゝゝ」

頬杖をついて前を向いてる茜を、横目で見た。今ならいけるか？

「なあ、茜？」

スッ、

自然と左手が、茜の机の上に動いた。さりげなく、普通に済ませうゝゝゝ

「昨日のこと――」

「シャーペンでドーンゝ」

「いだああああー！？」

シャーペンで左手の甲を力いっぱい刺された僕は、HR後、保健室に直行した――

保健室。茜による理不尽な攻撃で負傷した左手を、保健室の先生に手当てしてもらっている。

「っ！っ！いつてえ」

「・・・はい、終わり」

「ありがとうございます、失礼しました」

ガチャ、

「あゝ、ちょっと待って」

「はい？」

なんだよ、はやく戻らないといけないのに。

「こつち来て、ここ座って。すぐ済むから」

「？」

一体何の用だろう。もう朝の掃除が始まっているというのに、ここにいと、サボることになるが・・・

「なんでしょう・・・」

「いやあね？最近、顔にしわが出来始めてね、肌も乾燥して力サカサになっちゃうし」

「は、はあゝ」

なに言っただこの人？別に、今に始まったことじゃないだろ。

「つか、その歳になつて今更そこ気にするって・・・あんだ、己の年齢把握できてないのか。どう見てもオバサンだよ？普通、保健室の先生って、もっと若い人だろ。どこにこんな年増としま女医がいるよ？ぜってーミスチョイスだろ学校！

「そこでね、立岡くんにお願いがあるんだけど――」

「手遅れだよババア」

「な、なんですってえ！？」

しまった、つい本音が。

「だれがあんたの手当てしてやったと思ってるの？」

「失礼しました」

「ちよつとちよつと！？ホントにすぐ終わるから！聞いてくれるだけでもいいから！」

「ったくゝなんですかババア」

「いい加減にしろよ、生徒だからって容赦しないよ？」

「本当に、少しだけですよ？」

「ありがとう。実はね、最近、顔にしわが――」

「そこさっき聞いたから、もうめんどくさいんだけど」

「お願いっていうのは・・・」

「はやく言ってください」

「美容を手伝ってほしいのよ」

「お断りします」

「本当？手伝ってくれるの？やったーありがとう！」

「おい聞けよババア、そんなこと言っていないだろ」

「じゃあ早速なんだけど・・・」

「おいおいおい！！勝手に話進めるな！なに？こっちの事情関係なし！？どんだけ頑固なんだコノヤロー！」

「だってえゝこうでもないかと、協力してくれそうにないから」

「強制的にかよ！？あんた先生やってる自覚ある？」

「お小遣いあげるからさ」

「金で釣るのかよ！？最低だな！ぜってー協力せん！！」

「ぶーー」

「なにが『ぶーー』だよ。もう戻りますよ？」

「あー待ってよゝなんでもするからあゝ」

「なんにもしないでいいよ！！気持ち悪いんだよ！！じゃあなババア！」

ガラガラガラ・・・ピシャッ

「もう、可愛くないね」

*

「つたく、学校にいるべき人じゃないぞ、あの人」

ひどい目にあつた。あんなのがいて大丈夫なのか？この学校は。いそいで教室に戻らないと、掃除時間が終わってしまう。まあ、だるい掃除だ、サボれるならそれに越したことはない。今日ぐらいいいつか。ゆつくり歩こう。

そんなことより、はやく茜の機嫌を直しておかないと、またあんなことになって、また保健室行つて、あいつの人生相談を聞くはめになる。それはいやだ。絶対に避けたい、当然だ。しかしもう一度謝つても、また「死ねやおらああああ！！」つてことになるに違いない。くっそお、どうすれば・・・

「おや、あきらくんじゃないか。どうしたんだい？こんなところで」「ああ、太田くんか」

階段を登つていたところに、逆方向から太田くんが降りてきた。相変わらず頭良さそうな雰囲気をもし出している。バカだけど。

「太田くんこそ、なにしとーと？」

「僕はーほら、整美委員だから、見回りだよ」

「そっか、大変なんだな」

「そうでもないけどね」

「・・・へ？」

「だって、ふらふら歩き回るだけだし、点検表も適当に『』とか書いてればいいから」

「お、おお・・・」

「掃除しなくていいからさ、最高の役職だよ」

「そ、そーか」

「うん」

こんなことを軽々しく言うなよ、先生いたらどうする――

「そーかー、楽しそうだなあ太田あ」

「・・・・・・・・」

言ってるそばから来ちゃったよ先生！！しかも、体育の中山じゃん、最悪のオプション付きだよ・・・

「なにサボってたんだ、あー？それに立岡、お前なんで階段にいるんだ？お前の掃除区域は教室だろ？」

「あー・・・」

なんでそんなこと知ってただよ！！お前、受け持ち2年だろ！

「堂々とサボりとは、いい度胸だな？」

「実はですね先生、これには深すぎる事情が・・・」

「あー、僕は見回りに行かないと――」

「こら待たんか！逃がさんぞ」

「いやあ先生、こんなところで会うなんて、先生もお暇なんですね？」

「まったくですよ」

「話を変えるな！！お前ら、絶対許さんぞ！！」

「またまたあ、そんなに怒ると老けますよ？おっさん」

「立岡、貴様！！教師に向かつてなんだ、その口の利き方はあ！！」

「事実を言っただんですけど、なにかご不満でも？」

「おお有りだ！！普通そんなこと教師に向かつて言わないからね？お前ら、どういう教育受けてきたの？」

「そんなことより、僕が木の上に住んでいる理由をお教えしましょうか」

「意味分かんないんだけど！？つか、そんなこと初情報ですから！！」

「もう、しつこいんだけど、掃除終わっちゃいますよ」

「くっそ、お前ら2人、あとで職員室にこい！！にげんなよ！！」

「はい」

「失礼します」

行くわけないけど〜」

なんとか逃げる事ができた。まあ、僕ら相当ひどいこと言ったけど。あんなの相手にしてたら、あの長すぎる数学の授業が一瞬で終わるくらい時間がかかってしまう。

太田くんとも別れ、教室に戻ってきたが、もう机を揃え始めていた。さあ〜て、どうやって紛れ込むかな・・・

「さてと、椅子を並べてつと・・・」

「おいしいい！！瑛！！今見ちゃったよ、さりげなく混ざろうとしてるところを！よくもそんな浅はかな案を実行できるな！！」

「なに言っつてんだ卓斗？ずっとここにいたぞ？」

「とばけんな！！一体なにしてたんだ！保健室行っただけだろ」

「も〜〜〜〜〜〜〜〜」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・なんだよ！？」

「別に意味はない」

「ワケ分からんし！！とにかく、はやく手伝え」

「へーい」

とりあえず潜り込むことに成功した・・・はず。

*

「はあ〜、どうしたのかな・・・」

昼休みも失敗に終わり、茜に声もかけられないまま放課後をむかえた。この時期になると、受験に向けて毎日のように塾があり、学校が終わると同時に、そのまま塾に直行する生徒がほとんどだ。僕も、なにもしていないわけではないが、3日に1回はサボっていたりもする。こう毎日塾があると、一日中勉強漬けのような気がして、人生を損している感じがする。しかし、もうすぐ期末テストだ。さすがになにも勉強してなかったらマズイ。英単語のひとつでも覚え

てテストに臨んだほうがマシだと思う。ちょっとは、危機感のひとつでも持つておかないといけないだろう。まあ、ボチボチやっていこう。

話がそれだが、はやく茜に謝っておかないと、幼馴染の仲がこんな形で終わってしまったら後悔してしまう。せつかく仲良くして築いてきた仲を壊したくない。どうせ帰る方向は一緒だ、すこし待ってもらつて、僕の気持ちを伝えよう。

「・・・って、なにしとんじゃあああ!!」

「ん？」

信じられない光景が目の前に広がっていた。左手首に極太輪ゴムが何重にも巻かれているではないか！手と腕の色がはつきりわかるくらい手首から上が真っ青になっている！もうすでに感覚がない。動かしそうとしても、ビリビリ痺れるだけで、びくともしない。すでに血が止まってるし!?

「い、いつのまにこんな地獄絵図が出来上がった!？」

「さっきからやし、ずーっと目開いとったけん、たぶんこんなこととしても気づかんやろーなと思って」

「わけわからん!!なんで起こしてくれんの!？」

「起こすのが意味わからんし、日頃のうつぶんを全部ぶつける絶好のチャンスが無駄にできんしね」

「バカヤロオオオ!!」

茜によつて、ますますに病院行きになりそうな状態になってしまっている。なんで気づかなかった?だつて、輪ゴムだよ?しかも極太。それをバレないように何回も巻きつけるなんて結構難しいはず。それだけ僕が、ボーっとしていたのだろうか。なんたる不覚・・・

「と、とりあえず、これ、はずせ!血が止まるうう!」

「たのしーな、瑛が悶絶する光景」

「悪魔だ・・・なんで、こんなこと・・・」

ヤバ・・・血が流れてないから意識が・・・視界が・・・狭くなつて・・・

「だって・・・気づいてくれないもん・・・茜の、気持ち・・・」
「・・・？」

なんだ？さっきまでの恐ろしい顔から、なんか、悲しそうな、寂しそうな顔に変わった。

「こんなに・・・長い間一緒にいたのにさ、ずっと、言いたかったこと、言えなくて・・・なんか、イライラしちゃって・・・」

「・・・あ・・・かね？」

なぜだろう。茜が昨日なんであんなに怒っていたか、分かる気がする。このタイミングを、逃すわけにいかない・・・

「あ・・・のさ、昨日さ、茜を怒らせちゃって、僕、その日にちゃんと謝ればよかったのに、できなくて」

「・・・・・・」

「今日来ても、全然相手してくれないから、嫌われちゃったって思った」

言ってしまったおう、全部。

「ちっちゃい頃から仲良かったのに、いきなり、その関係が壊れたら、絶対嫌だから・・・だから・・・」

「・・・・・・」

「・・・ごめん・・・」

「・・・・・・」

言えた。これでまた、いつもどおり一緒に帰れるし、またバカやったりできる。僕の心の中のモヤモヤは取り払われた。気持ちが楽になった。また明日から普通の毎日を送れる。本当によか

ガバアアッ

「な・・・」

「・・・・・・」

一体なんだ？いきなり抱きつかれた。茜もホっとしたのだろうか。だったらわかるけど、いままであったか？こんな抱きつかれたの。

「・・・き・・・だよ・・・」

「・・・え？」

「・・・すき・・・だよ・・・」

「あつ、・・・え？」

はつきり聞こえた言葉。突然告白された。これが、茜の気持ちだったのだ。どうしよう・・・いきなりそんなこと言われても、どう返事すれば・・・だって、そんなこと、考えたことなかったから・・・茜を、ちいさい頃からの、いわば親友の仲だと思っていたが、それ以前に、彼女は異性だ。中3にもなると、好きな人ぐらいできるのは当たり前だけど、こんなに近い存在だった僕を、好いてくれている。こんな僕を。けど、僕はどうか？茜だぞ？そんな恋愛感情なんて茜に抱いたことなんてなかった。こんな可愛い子が告白してくるなんて、普通の赤の他人だったら、喜んでOKするだろう。でも、僕の目の前にいる

のは、「友達」として見てきた茜だ。女の子だけど、僕達の仲間だったんだ。けど、いまこの告白の返事をどうするかで、みんなと接する態度が変わってしまうような気がして。怖かった。

「もう、幼馴染の仲じゃ、いや・・・」

「っ・・・」

「瑛といるとね、安心しちゃって、ホントの自分の気持ちも言えなくて、これを伝えちゃったら、みんなに何て言われるか、怖くて・・・」

「・・・」

茜も、怖かったんだ。みんなとの間に溝ができてしまうかもしれないから、なかなか言い出せなかったんだ。

なんだ、お互い、心中は同じじゃないか。いまのこの状態を維持

したいがために、こんな苦しみに耐えてきたんだ。だったら・・・
「茜」

「・・・？」

「茜は、いまのみんなとの関係を壊したくないんだよな」

「・・・（コク）」

「だったらさ・・・僕と茜が、これ以上の関係になったら、だめだと・・・おもう・・・」

「・・・」

なんて顔してんだよ・・・茜・・・そんな悲しかったんだ。酷い奴だな、僕。茜の思いを踏みにじってさ・・・ああーくそおっ！！なんて言ったらいいんだよ・・・

「だ、だから・・・さ、ゴメンけど、いままでの僕達でいよ？」
「・・・」

「あか・・・ね・・・」

「ごめんね、困らせちゃって・・・うん、わかった、瑛の言うとうりだね、うん」

自分のバッグをからいながら、僕の話に納得してもらった。これで・・・いいよな？

「帰ろ、瑛」

「お、おう・・・」

思ったより元気だった。そんなにショックじゃなかったのかな？僕に事実上フラれて（自分で言うなってばよ・・・）吹っ切れたのだろっか。まあ、なにも変わらず、ということかな。

「今激しくコブラツイストしたいなあ」

「今激しくここから逃げ出したいなあ」

いつのまにか、僕の腹の周りに手を回されていた。逃げ様がない・・・どうしよう、このままじゃ確実に死んじゃうじゃないか。絶対手加減しないよこの人。

「あのおゝ帰るんじゃ・・・」

「なんにも聞こえない」

「そ、そんな・・・お願いだからやめてやああああ!!」

この小さい体でなぜそんな大技が!?!?!ああ、意識が・・・

「・・・ばかあきら・・・」

*

あのあとも、気まずい空気になることはなく、いつもど通りに接することもできた・・・んだよね・・・

そう、あくまでこれは、僕の頭の中にある記憶の振り返りでしかない。この現実を受け入れられず、過去の懐かしい日に逃げてきたこのまま行くと、もうすぐに期末テストがあつたのだが、ヒドイ結果だったことは一度ここに綴った。そしてすぐに、あの「終わり」だ。いままでみんなと過ごした時間はなんだつたのだろう。長い間眠り続けて、ずっと夢を見ていた・・・なんてことになってはくれないのだろうか。悪い夢で、済んでほしい・・・

これが、運命なのだろうか。自分だけ生き残って、先に逝つたみんなの顔を思い出して、その度に泣いて、辛くて、ここにいての意味が分からなくなるくらい頭がおかしくなるのが、自分の運命なのか。こんな人生、あんまりだろ・・・ねえよ・・・

あれから僕は、しばらくこの避難所にいた。行くあてなんてないし、ここの人たちと共に行動すれば、きっと安全だ。きっと、助かるんだ。

そう思った――

すぐに空襲にあつた。一瞬で炎に包まれ、大勢の人が焼け死んだ。ここでいっそ、死んでしまおうかと考えたが、目の前で人が焼かれる惨劇を見た僕は、怖くなって、必死でここから離れた。何人もの

人とぶつかり、その度、押しのけて、振り払い、かきわけながら走った。どれだけの人に、怪我をさせただろう。もしかしたら、僕のせいで逃げ切れなかった人がいるかもしれない。生きるのに一心不乱で走り、遠く離れた森の中に、ひとりで逃げ出してきて、避難所を振り返ると、逃げ惑う人々が、塵のように吹き飛ばされていくのが見えた。

「どうしてあんな簡単に、人殺しができんだよ・・・おかしいだろ、絶対・・・」

声がかすれる。ろくに言葉がでない。そんななかでも、これだけはつぶやける。

このまま遠くに行こう。「あれ」から逃げながら・・・

「・・・えっ・・・」

僕は、見てしまった。飛んでいる黒い物体から、

人が、降りてくるのを――

夜も更け、日中よりも寒さが増し、綺麗な満月と呼ぶにはまだ若干物足りない形の月が、真つ暗な闇を明るく照らしていた。周囲の建物がすべて焼き払われ、街の灯りが全くないのもあってか、より月明かりがはつきり輝いて見える。一見、素晴らしい絶景にも見えるこの景色。写真に収めておきたいぐらいだ。

ただ、時折目に入る飛行船が、月明かりによって黒光りしながら飛んでいるのを除いてだ――

「なんだよ・・・あれ・・・」

そして僕は、見てしまった。地上に降り立った飛行船から、人が出てくるのを。

「ひ、ひと？」

暗いし遠いからよく見えない。唯一確認できるのは、人らしき姿だけ。飛行船の中の明かりが入り口から漏れている。そこから現れた人。一体なんのために、こんなことを・・・ん？なんだあれ、なんか・・・おかしい・・・なんというか、動きが、自然じゃないよな。ずっとその場に立ったままだし・・・っていうか、あいつら服着てなくね？うつそ・・・すっぽんぽんじゃん。どこの国のやからだよ。こんなことして、自分達がなにをしてきたのかわかってるのか――

ヒュン・・・

え？どこいった？消えたんだけど・・・

『いやああああ！！ない？い、痛い痛い！！痛い痛い痛い！！あ

後ろから心臓を轟かせる爆音が響いた。振り向くと、大きな火の玉が、きのこ状に巻き上がっていくのが見えた。こんなもの、テレビでしか見たことがない。本物なんだ、これが、現実なんだ――

「ひいひいひい！！く、来るなあ！！あつがああああ！！・・・」

「いやあああ！！人殺し！！」

「お、おい！なにしてたんだ、逃げるぞつ！！」

「待ってよ！！タカシ・・・ぎやああああ！！」

「ミホ！！つくそ！コノヤロー！！離れるよ！！」

「いたつ！！うそうそうそ・・・いやああ！！」

「なんなんだよコイツ・・・こんなに・・・殴ってるのに・・・なんでビクともしないんだよ！！」

「痛い痛い痛い！！タ、タカシ・・・たすけ・・・て・・・」

「っ・・・もう、ムリ・・・うわあああ！！・・・」

「タカシイイイ・・・」

もう、見てられない・・・はやく動かないと・・・やられる・・・

やっと動き出した、振り向いた瞬間だった。

ヒュイイイイイ！！！！

轟音と共に、自衛隊の戦闘機が、こっちに向かってくるのだ。

ゴオオオオオオオ！！！！

ものすごい爆風と、鼓膜が破れそうな爆音。必死で飛ばされまいと耐えた。戦闘機は、僕の真上を通過し、すぐ目の前に墜落した。

そのとき目にしたのは、ボンネットに張り付いた「彼ら」と、視界を遮られ、それに必死に抵抗しているパイロットだった。

墜落と同時に、強い衝撃とすさまじい熱風。周りの木々はすべてなぎ倒された。おかげで周辺が広がったと共に、炎上する戦闘機が見えた。おそらく、パイロット全員死亡。「彼ら」だって、生きているとは考えられない。もし、ひとなら間違いなくバラバラになるだろう。そうあってほしい・・・

ガシャアアン！！

ガラスが割れる音。それだけであってほしかった。

バリンツ、バリツ、パキツ、ガシャ、バリ・・・

「・・・っ！！」

寒気がした。これからなにが始まるのか、すべて悟ってしまったからだ。明らかに足音と思われるこのリズム。しかも、こんな炎の中で動けるものといえば・・・

・・・ドスツ・・・

「マジか・・・」

「彼ら」しかない――

「・・・」

現れた、僕の目の前に。

「あっ・・・」

はつきり捉えることができる。普通の人間と変わらない身体。肌の色は・・・日本人と一緒にか？ちよつと白い気もするけど。顔立ち

もアジア系だし、髪も黒い。けど、なんだろう・・・この雰囲気。動きがカクカクして、表情もない。まるで、ロボットのようだ。

「彼ら」は・・・3人？3体？とにかく、なんとか助からないと・・・言葉とか、通じるのかな・・・

「は・・・あ・・・」

だめだ、声が出ない。完全にビビッてしまっているようだ。体がブルブル震える。バカ！冷静に話しかけてどーすんだっての！逃げなきゃ・・・「っ・・・っ・・・！？」

あれ、おかしい？動かない。まさかの、金縛りってやつ！？なんで・・・ヤバイヤバイ・・・ホントに殺られるって・・・

ドストドストドスト

「・・・！！！」

くっそお！喰われる・・・

ビシュン！！

「っ！！！」

「・・・！！！」

な・・・んだ？銃弾？こいつ、撃たれたのか・・・

「・・・！！！」

「ぐっ・・・」

燃える機体に目をやる。あの人、生きてたのか・・・

「・・・！！！」

あとの2体も、燃え盛る機体に振り向く。ゆっくりと・・・

ポタッポタポタ・・・ポタ・・・

「っ！！！」

僕に近づいてきた方は、右腕を押さえていた。紅い血が流れている。

「……………」

「……………」

じつと、こっちを見ている。顔色ひとつ変えないでいる。痛くないのだろうか。いや、痛いに決まっている。顔を歪めているのだから。

「……………グウウ……………」

「……！」

なんだ？表情が変わっていく！この顔は……………」

「グウ「フアアアアア……………」」

「うつ……………」

こんな近くで吠えられた。耳が……………」

ザッ、ザッ、

・ 後ろの2体が、燃える機体に向かって歩き出した……………これは……………」

ヒュン……………」

「逃げてええ……………」

グワシヤアアアン……………」

機体に突っ込んでいった……………必死で生きようとするパイロットに、2体が喰らいついた。

「あつがああ……………ああああ……………」

バグシュ・・・パキュ・・・ぐちゃ・・・バリバリツベシュ・・・

遅かった・・・

骨が碎かれる音・・・2体のうち1体は、頭からかぶりつき、脳を引きずり出し、べしゃべしゃと音を立てながら、もう1体は、横腹に噛み付き、肉を食い漁った。同時に聞こえる音、水道から水が流れるのと同じようなノイズが耳に入ってくる。

僕は耳を塞いだ。

もう・・・いやだ・・・

ヒュンヒュンヒュンヒュン・・・

一瞬で辺りが明るくなる。目を瞑るほどの強い光が、赤い粉塵を撒く機体のうしろからだ。プロペラが回転する音、ヘリだ。しかも自衛隊の。すぐそばに現れたヘリは、右腕を押さえている「彼」を照らしている。じつとヘリを見つめる「彼」は、立ち尽くしていた。しかし僕は、自分が見たのを疑いたくなるような、光景を目撃する。

『その少年！！伏せなさい！！』

「なっ？」

言われるがままに、雑草の生い茂った地面に伏せた。

『FLIR確認！・・・手前の2体と奥の1体の体温に異常！<目^{ターゲット}標>と識別した！』

『クーガー1より本部！<目標>確認！民間人が追い詰められている！送レ！』

ガアッ

『本部よりクーガー1、射撃を許可する』
『了解!!』

『＜目標＞は要救助者の至近にあり！攻撃は、ガンのみを使用せよ！繰り返し、ガンのみの攻撃だ!!』

『了解！攻撃開始!!』

ガガガガガガガガガガ!!

発砲が始まった。向こうの2体に向け撃ち込まれる。砂煙を巻き上げ、見えなくなっていく。

ドスッ、ドスッ、ドスッ、

近くにいた「彼」が、砂埃に向かって歩いていく!?

『砂埃で見えません!!』

『構うな！撃ち続けろ!!』

『ハイッ!!!!』

ガガガガガガガガガガ!!

怒涛の攻撃。もう煙で何も見えなくなる。

『・・・っ！残弾ゼロ!!』

『機関銃に切り換えろ！間髪入れるな!!』

『ぐっ』

ババババババババババ!!

さらに加わる銃声。あっちも必死で戦っている。僕は、匍匐前進

でその場を離れる。

「くっ……」

すごい砂埃……目が痛い。

『下の状況がわからない……』

『撃ち方やめ!』

『ここからではだめだ……一気に畳み掛けるぞ! 降下準備!』
『了解!』

ザアアアア!

なんだ、降りてくるのか。あいつらを倒したあとに、ついでに助けてもらえりやいつか。どこか、木の陰にでも……よし、これでちよつとは平気か。

ビュンツッ!

「うおっ」

いきなりの突風。おかげで周囲が晴れた。一瞬で砂埃を取り払った強風は、すぐにやんだ。

『周囲が晴れるぞ! 警戒しろ!』

ガチャッ

号令と同時に銃を構える。人数は……5、6人か。これなら倒せる――

ドウツツッ!!

体がガツクンガツクン揺れる地震。上下に大きく揺さぶられる。これは・・・まともに立ってられない・・・

『うわああああー！！！』

叫ぶ声。目をやると、取り囲んでいた5、6人の自衛隊が、巻き上げられてゆく。軽々しく上に吹き飛ばされるその奥で、砂に混じって光輝くもの。

そして、その中に立っている3つの人影。

そう、僕はここで、初めて――

人以外のものを、再認識した。

ヴオオオオオオオ！！

楽器のコントラバスの低音に似た音が、この街全体に大音響で響いた。

同時に一面雲に覆われていた空が晴れ――

颯爽と巨大な黒い物体が飛来したのだ。

全長何十メートルもある機体。エンジン音と機械が動く音が混じって、聞いたことがない雑音になっている。

まるでそれに帰っていくように、3体の「彼ら」は静かに浮き、上でそれを待っているように佇む母船？のようなものに消えていった。

「・・・・・・」

ただ啞然。何が起きたのか理解できない。いま見たものは、映画やアニメにでてくるような、僕の中では架空のものが、現れたのだ。

から。

僕はしばらく、その場から動けなかった

2010年12月29日。突如其来襲した飛行物体と未確認生命体の出現について、日本国政府は、特別非常事態宣言を発令。謎の敵に対し、首脳国に協力を要請した。中国地方までの侵攻が確認され、迎撃に臨むが、わずか15分で全滅。世界最強を誇るアメリカの軍事力ですら、歯が立たなかったのである。原因は、最初に現れた機体の数十倍の大きさがある母船だった。もちろんこちらの兵器では、傷ひとつ付けることができず、母船から放たれた閃光で、半径10キロ以内が消滅した。

これにより、日本の軍事力は無力化。自分の身を案じ、身勝手に海外に避難する政治家が現れ、国の秩序は崩壊。取り残された国民は、空港に群がり、我先にと日本を離れた。しかしそれは、ほんの一握りの人数。飛行中に襲撃を受け、墜落した旅客機がほとんどで、運よく脱出できても、これだけの日本人を受け入れてくれる国は無く、行き場をなくした人々で、北アメリカやヨーロッパの空港は溢れた。

現在、近畿地方までの地域が占領され、首都圏に接近しつつあった。残ったわずかな人数で対策機関を設けたが、侵略の勢いは衰えず、国の機能は衰退の一途を辿った。

もう、「彼ら」を止めることはできない――

*

太平洋上、海上保安庁船「しきなみ」南鳥島近く。現在、臨時政府が置かれている。

総理大臣の外交期間中、鷹野官房長官による総理代理が行われている。謎の敵に対抗する手段を討論するため、宮田外務大臣にも帰

国してもらつ。

ガチャ

「失礼します、官房長官、宮田外務大臣が到着されました」

「そうですか、では、迎えに行きます」

「連絡によると、そう機嫌はよくないようできて・・・なんでも、総理の戦場地訪問にかなり反対されたようで・・・」

「そりゃそうでしょ、実際私は止めることができなかった。責任は私がとりますよ」

「・・・では、そろそろ」

「はい・・・」

・・・ヒュンヒュンヒュンヒュン・・・

ガラア

「お疲れ様です、宮田外務だい——」

「どけっ!!」

ドンッ!

「たあーかあーのおー!!」

「ご苦労様です、宮田外務大臣」

ガシッ!

「貴様!己がなにやってくれたかわかつとるのか!!」

「・・・」

「あんなとっちゃん坊やになにができる!!」

「平和的解決を望む総理なら、心配ないかと」

「ふざけるな！あいつになにかあったら、貴様のせいだぞ！！」

「責任は私がとります」

「簡単に言いおつて、貴様それでも――」

「我々には時間がありませんので、続きはあとにしてもらえませんか」

「ぐぬぬ・・・」

「それとも、今伝えなければならぬ、大事な用件でもあるのですか」

「・・・きちつ・・・」

齒軋りを立てたあと、鷹野の顔を睨みながら、奥へと入っていく。その後ろ姿を鷹野は、無表情で見たあと、その後を追った。宮田の機嫌は最悪。肥満体型にずぶとい顔を歪ませながら、船内の廊下をづかづかと歩く。後ろにいる鷹野もまた、やるせない気分だった。（なんでこんなヤツが生きてんだ・・・）、心の中でそう呟いた。表には出せない感情を募らせ、会議室への道のりを、宮田をいやいや誘導しながら進む。

到着した宮田と鷹野を待っていたのは、すでに会議を始めていた部屋だった。ずっと一勢に立ち上がる議員を横に、長テーブルの奥の席にもたれて座る。同時に全員が元の席に座る。

少しの沈黙のあと、鷹野が重い口を開いた。

「敵の侵攻は？三井委員長」

尋ねられて立ち上がったのは、この作戦会議の委員長を務める三井だ。年齢は若く、凛々しい顔立ちを持つ。政界のみならず、テレビや雑誌に取り上げられており、彼を支持するのは女性が多い。もちろん幅広い年齢層にも信頼され、将来有望の若者だ。

「はい、長野の駐屯地からの通信によると、西日本の通信網は完全に途絶しました。首都圏に接近中の飛行物体は、さらに数を増やし、勢いを強めています。今の戦力では、弾薬の無駄遣いだと・・・」

「国民の避難状況は？」

「混雑しています。東北の空港では、一機あたりの乗客数が定員の10倍になり、離陸できない状態の旅客機が多く、北海道では、私有の漁船などを使い、近隣国に避難する者がいましたが、不法入国で大勢の国民が立ち往生しています」

「・・・わかりました。ありがとうございます」

静かに座る三井。

「ふんっ、まさに難民だな」

ここでしゃべりだす宮田。頬杖をつき、続ける。

「アメリカやロシアに掛け合ってみたのか？核でもぶち込めば、勝てるんじゃないのか？」

まるで他人事のように語る宮田。鷹野は、ため息をつきながら。

「その案はすでに実行しました。彼らの兵器でさえも、あの機体に傷ひとつつけることができなかったんです。それに、核なんて物を使ったら、敵を倒す前に、この国が滅んでしまいます。別の案をかんがえましょう」

「綺麗事を並べているようだが、鷹野君。核を使用する以外に、奴らを撃退する威力のある兵器があるのかね」

「・・・ですがっ」

「核ミサイルを超えるものを、長い時間をかけて作るより、今ある物を惜しみなく使うほうが、いいと思うが？」

挑発するような顔を見せる。確かに宮田が言ってることは一理ある。人類最強の兵器を用いて、正体不明の敵を一掃するのがいい、そんな考えが心の隅にある。だが、鷹野は納得できなかった。当然だ、唯一の被爆国である日本が、核を保有することなんて許されない。それに、核爆弾なんてものをドンパチさせたら、本当にこの国がなくなってしまう。

「ありえない！もう少し考えてものを言ってください・・・」

少々感情的になったあげく、相手があの『宮田』だということに気づき、語尾が小さくなる。

「ふんっ、一度使ってみればいいのだ。九州辺りでよからう」

「っ!!」

この言葉に、鷹野はついにキレた。もの凄い形相で宮田に迫る。軽々しく放ったこの台詞に、鷹野は、相手が年上だということを忘れ、宮田の胸倉を掴み上げた。鷹野は、込み上げてくる怒りを堪えることができなかった。

「……………」

「てめえは知らねえんだよ……あんなになっても、まだ生きてる人がいるってことがっ……………」

「……………」

宮田は黙ったままだった。

「あんたはいいよなあ……家族も避難して、未練も何もないからだから平気でそんなこと言えるだよ……」

ざわつく周辺。しかし、構わずに言う。

「けど……俺の家族は……うううっ……………」

宮田にすがりつくように膝から崩れる。宮田は、それをじっと見ているだけだった。

しんと静まる室内。少しの静寂があつて、鷹野のすすり泣きが響くなか、宮田は口を開いた。

「……………それだけか」

「……………」

「……………はあ……ひとつ言っておく」

鷹野は俯いたままだ。

「お前、まだこの世界を理解してないだろ」

「……………」

ビクッと反応する鷹野。ゆっくりと顔を上げる。

「家族を亡くしたと言ったな。そんな小さな犠牲、今後起きること

に比べれば、ただの序章にすぎんわ」

「つつつ!!!」

憎しみの表情を浮かべる鷹野。自分の家族を軽く言われたことに、耐えられなかったのだ。

「これからも何百万と人が死ぬ。たとえ家族を奪われても、いまの状況を打破しない限り、どこにも幸せは訪れない。いつまでもめめそしていても、何も変わらんぞ!」

「.....」

自分の心の持ち様で、チーム全員の士気が落ちてしまう。自分が一番しっかりしなければならぬ立場であることに気づいた鷹野。家族を亡くした悲しみなんか、現場では邪魔であることを認識した。

「.....ふう.....」

「自分の愚かさを、恥を知れっ!」

立ち上がる宮田。下目で鷹野を見下す。

「ふんっ」

そしてここから去ろうとした・・・そのときだった。

『.....!!』

『.....しろ!!.....く.....』

『.....!!』

廊下が騒がしい。バタバタと走り回る音が聞こえる。そして。

「大変ですっ、鷹野官房長官!!」

「.....ど、どうしました」

我に返ったばかりの鷹野は、少し反応が遅れた。

「外交中の総理の警護にあたらせている者からの連絡が、たった今途絶えました!!」

「っ!!」

「な.....に?」

緊張が走った。正気になった鷹野は、すぐに口を開いた。

「最後に通信したのはいつですか!？」

「5分前です!まもなく帰国するとの内容のあと、いきなり……」
「……いつたいなにが……」

「バカが!!だから言ったんだ!どうする気だ鷹野!!」

どうにかして総理の安否を確認したい。しかし、現在地がわからない以上、無事かどうかなんてわかったもんじやない。

もちろん、何も策が無いわけではない。控えの護衛隊や自衛隊が待機している。なにかあれば真っ先に飛んでいけるようになっていくはず。すぐにでも出撃命令を出したい。

だが、尚も侵攻中の敵を迎撃する人数を、ひとりでも多く確保したい。次々と突破される防衛線が、鷹野の決断を鈍らせていた。

「（なにか……なにかないか……なにか——）」

それは、いまの日本において、あまりにも重すぎる現実。

『総理が……死亡、しました——』

我が国の統率者の「死」である。

ここは・・・どこだ？

畳の上？に大の字になって倒れている。

木製の天井。畳の臭い。時折吹き抜ける風が涼しいような、肌寒
いような。

知らない空間。いや、記憶に無いただけなのかもしれない。

でも、どこか懐かしい。なんだか落ち着く。知らない場所なのに。
動こうとしても、体が反応しない。ズシリと畳に押さえつけら
れている。力を入れようとしても、スツと、足から抜けていつてし
まう。

・・・なにもできない。

僕は、どうしてここにいるのだろうか。

何か、大事なことがあったような。こんな、穏やかな陽気の中で
はなく、もっとこう、寒々してて、なにも無くて、暗くて、怖くて。
・・・悲しくて・・・苦しくて・・・

『・・・キー・・・』

んー？なんか聞こえる・・・

『アキーー、起きなさい』

なんだ、僕を呼んでたのか。そういや、小さいころはよく「アキ
って呼ばれてたっけ。

けど、誰の声？お袋の声・・・じゃないよな。なら一体誰の声だ？

『なにしてるのっ、遅刻するよ？つたく、なんべん呼んでも起きん
っちゃけん』

次第に大きくなる声。すぐそこまで来てるのか。それでも、声だ
けだ。声の主はわからない。

周りを見渡すこともできない。ただ、天井をじつとみてるだけ。

『もうっ、ホント遅刻するけんね！？知らんよ！』

・・・遅刻？なにに・・・ヤベツ！学校やんか！はよ行かないか
んのにつ・・・う、動かんし！体おも！！なにこれ！？いやいやい
やっ、マジでヤバイって！っか時計は！？いま何時？うわーサ
イアクだよ・・・全然身動きできないよこれ。なに？本体は寝てん
のに、意識は冴え渡ってるってか？わっけわかんねーよ、どんだけ
眠たいんだよ本体いいっ！！

『・・・・・・・・』

あー遂に諦めたちゃったよ。ヤベーよ、いきなり声止まったんだ
けど。見放されたんだけど。

てゆーかここどこ？早く起きないと、ずっとこのままだよたぶん
！それは絶対いや——ってなんだよ、これ・・・血？血が、でて・
・うつ、や、やば・・・体が・・・全身が・・・痛い・・・あつ
ぐ・・・だめだって・・・し、死ぬよ・・・これ・・・も、む・・・
り

*

「・・・・・・・・っ」

痛い。全身が痛い。ズキン、ズキンと規則性あるリズムで痛みが

くる。

だんだん明るくなっていく。手足の感覚もある。自分がどんな体制でいるのかもわかる。

どこかに寝かされているようだ。いつからここにこうしていたのだろつか。そして、一体誰が僕をここまで連れてきてくれたのだろう。誰でもいいか。とりあえず、その親切な人にお礼を言っておこう。

さて、起きよう・・・と思ったのだが、僕はさっそく様々な異変を目撃した。

？いざ目を開けようとしたところ、目の前に女の子

？その子はなぜか、僕の腹の上に平然と横向きに座っていた
？己が全裸だということ

それでは、ひとつずつピックアップしていこう。

まず？、目が覚めて最初にみたのが女の子。なにこのギャルゲーみたいな境遇。

次に？、しかも、スナック菓子食ってるし、ポロポロカスが腹の上にこぼれてんだけど。なに我が物顔で座ってたんだよ。つか怪我人だよ？僕。

そして？、これおかしくね？傷の手当をするのに服を脱がしたならまだわかる。見てのとおり、体のいたるところに包帯や絆創膏が貼つてある。ただそれだけのはずだよな？それなのに、なにゆえ全裸？せめて下着だけでも着せるだろ普通。

加えてその上に女の子ときたよ。もうこれ犯罪の域だからね？捕まっちゃうよ。

「・・・あ」

「・・・」

目えあつたあああ！！薄目で見てたのにあつちやつたよー！！
やべえよ、めっちゃこっち見てるし。ガン見だよ！！

「・・・えいつ」

ズブズブズブ・・・

やめるー！ー！！鼻にスナック菓子突っ込まないで！！呼吸で
きないから！酸素を取り込もうとする度に、スナック菓子の細かい
カスが入ってくるよ！なにこの子！？あかの他人を死に追いやるう
としてる！？

・・・もう・・・ムリだあ！！

「死ぬううう！！」

「あー起きちゃった」

たまらず起きる。と同時に女の子は、パツと立ち上がった。イコ
ール、僕の一物がもれなく見えてしまう。

「・・・」

「バカ！！なに見てんだ！！」

「へっ、大した大きさでもないくせに」

「やかましいわ！！」

気になっているのは秘密だ。

「な〜に？あんたを拾ったのあたしだよ」

「っ・・・」

「手当てしてあげたのもあたし」

「そ、それは・・・」

「気持ちよくしてあげたのもあたしだよ」

「あ、ありが・・・っておいしいい！！いますんごいこと言った
よ？僕が寝てる間になんてことを・・・」

「マッサージなんだけど・・・」

「えっ・・・」

あちゃー、やっちゃったああ・・・どうするこの展開。

「あ、あーそーかー、それはありがとうねー」

女の子の頭を優しく撫でる。汗止まんね・・・

「あたし、15なんだけど」

「よしよし——ん？」

頬を膨らませて言う女の子。

「・・・15なの？」

「失礼な！ちゃんと小学校卒業してるよ！！」

「いやいや、そこまで遡らなくても・・・っていうことはだよ？僕
と同じ年ってことか・・・」

「・・・なに？」

「いや・・・」

なんつーか、中3に見えない。だって、どう見ても——

「小学生だろ」

「コオ～ロオ～スウ～～～～」

しまった、つい心の声が・・・

「ゼツタイ許さ～～ん！！」

すごい、急に態度が変わった。めっちゃめっちゃ怒ってる。

「もっかい眠らせてやる～～」

「ま、待てって。悪かったよ」

「がうううううう」

「あんま怒るな。カルシウム摂ってるか？」

「はいキレたー、絶対死なすっ！！！！」

近くにあった鉄パイプを振りかざす女の子。目がマジだ・・・

「死ねえええ！！」

それを勢いよく僕の顔面めがけて叩きつけようとしてきた！！

「や、やめ・・・」

ガシッ

「あ・・・」

「・・・っ」

恐る恐る目を開ける。

すると、鉄パイプを振り上げたまま止まっている凶暴女の腕を掴む手があった。

「騒がしいと思ったら・・・またお前か」

「は、離せ！こいつにトドメをさして昇天させてやるんだああ！！」
暴徒の後ろにいたのは、背の高い男。見る限りでは、腕っ節の強そうな、ガツチリした体格だ。

「はあゝあぶね」

「おうおう、お目覚めかな？少年。具合どう？」

「あ、ああ。いまはなんとも」

「そりゃよかった。俺が見つけて、ここに運んでから、軽く3日は寝てたからな」

「そ、そんなに？っか、さっきその子が『あたしが拾った』とか言ってたけど」

「はあ？なにそれ、こんな小枝みたいな体で運べるわけないじゃん」

「小枝言うな！！」

「ひやはははは、わりいわりい。とにかく、元気そうでなによりだ」

「あ、ありがと・・・」

「なんだよお、礼とかいらんよ。てゆうか、何か着る？」

「っ！！」

べ、別に、忘れてたわけじゃない。ホントだ。

*

「・・・ん？なんだ」

「いや、聞きたいことがあつて」

あわてて布団のシーツを体に巻いたあと、改めて訊ねた。
「俺でよかつたら聞くぞ」

「・・・僕、どこにいました？」

「・・・は？お前なに言つて・・・」

「気がついたら、ここにいた」

「・・・」

「なになにー、なんの話い？」

「うつさいな！あっち行つてろ」

「ぶーーー」

とぼとぼ部屋を出て行く暴徒。

「・・・ふう、え？なに、覚えてないわけ？」

僕の横に座りながら、聞いてくる。

「ああ、ただ・・・」

「・・・ただ？」

「黒いなにかが、いっぱい飛んでた」

「・・・っ」

いま思い出せるのは、これだけだ。

「あとは、なにも・・・」

「・・・じゃ、じゃあさ、こついうのは見た？その黒い物から、人が出てくんだよ」

「っ！」

「それで、逃げる連中を次々と喰い殺す——」

「やめろっ！！」

「っ！」

かなり大きな声を出した。彼は、かなり驚いた様子。それから、喋らなくなった。

「・・・見たよ・・・人が・・・どんどん喰われるのを」

「・・・」

全部思い出した。だからここで、そのすべてを話す。

「いきなり飛んできてさ、あつという間に街がなくなって・・・逃げても逃げても、奴らがいて。たくさん人殺して、燃やしてさ、平

気な顔してるような感じがして、すっごいムカついて、いつか絶対仕返ししてやるんだって思った」

「……………」

「でも、気づいたら病院の中でさ、そこで、友達の死体見て、また意識飛んで、また起きたら、もうそこは、火で真っ赤になってた。

もう、無我夢中で走り続けて、深い森に隠れて……………」

「……………」

彼は、黙って聞いてくれた。

「そしたら今度は、人が人を喰ってんだよ…………ぐちゃぐちゃ音立てながら…………それ見て、わけわかんなくなつて、動けなくなつて…………めっちゃ血とか内臓とか生で見て、吐きそうになつて、頭すげー痛くて、何回も気失いかけた。でも……………」

「……………」

「でも……………」

目頭が熱い。体の振るえもさつきから止まらない。

「…………死にたく、なくて…………っ…………うう……………」

「……………」

隣にいた彼は、そつと僕の肩を抱いた。

「…………ずっと…………ひとりで、怖くて…………寂しくて……………」

「もういい」

「うう…………っぐ……………」

頭を優しく撫でてくれる。

「お前は、よく頑張ったよな」

「うううう……………」

もう、まともに話せない。泣くことしかできない。

「つらかったよな、きつかったよな、しんどかったよな」

静かに体を抱かれた。ゆっくり、ぎゅつと。

「もう、ひとりじゃないぞ。俺達がいるからな」

「ここが、お前の居場所だ――」

それは、ずっと孤独だった僕にとって、何よりも嬉しい言葉だった。

大きな体に抱かれて、僕は、堰を切ったように、大声で泣いた。その体は、温かくて、優しくて、安心できた。

そして、どこか懐かしかった――

気が付くと、ベットのの上に横たわっていた。どうやらあのあと、泣き疲れて、あの人の腕の中で眠ってしまったようだ。なんか・・・恥ずかしいな・・・だいたい泣いて疲れるって、赤ちゃんか僕は。日の明かりがわずかに差し込む部屋の中。ここに来てすぐいたところと同じ部屋だった。周りはコンクリートの壁と、高い位置に窓がポツンとあるだけ。床も同様、一面が灰色で、裸足で歩くには、かなり寒いだろう。

「・・・はあ、やっぱり・・・」

裸のままだった。昨日は、ベットのシーツを体に巻いただけだったから、服を着ていない状態。

「うううううさむっ」

起床早々、凍死寸前に陥る。なにか着るものは・・・

「・・・あ」

ベットの横に置いてあったパイプ椅子の上に、見覚えのあるものを見つけた。自分の学校の制服だ。しかし、

「これじゃ・・・さすがに」

手に取って広げると、ビリビリに破れていた。ズボンも原型を留めていない。

いまさらだが、この制服を持っていて気づいた。ここに来るまで、いままでずっと、この制服を着ていたのだ。あの長い間、いつの間にかボロボロになってしまっていた。改めて見ると、あの懐かしい日々が蘇ってくるようだった。この制服を着て、学校生活を過ごし、卓斗や茜、太田くんや立華さんと過ごした。いろんな出来事が、この制服に刻まれている。こんな風になってしまつと、ちょっと悲しい。しょうがないのかもしれないが。

パイプ椅子の上に戻そうとしたとき、パラッと紙切れが落ちてきた。四つ折になった紙を開く。ぐしゃぐしゃになって、読めなくな

っているが、なにが書いてあったのかは思い出せる。おそらく、卓斗と。×ゲーム（マス目を書いて、ひとりとは。、もうひとりとは×と決めて、先に5個縦、横、斜めに並べた方の勝ちという、囲碁のよなもの）をやったのだろう。微かに、×が5個並んだ跡が残っている。どちらが勝ったのかは、覚えてない。しかし、よくも飽きずに毎日やったものだ。教室の後ろの黒板でこれやって、よく先生に注意されたのを思い出した。

しかし、相変わらず寒いのは変わらない。早くこの独房のような部屋から出たい。とりあえず、ベットのシーツを体に巻いて立ち上がる。ぺたぺたと冷たい床を歩く。

ギイイイイ・・・

妙に重たいドアを開けた。と同時に冷たい空気が一気に流れ込んできた。さらに体温が下がる。振るえが止まらない。体を縮ませ、部屋の外に出る。

そこには、長い廊下があった。ずっと奥まで続いている。その両脇には、さっき僕がいた部屋と同じぐらいの個室が、これも奥までずっと並んであった。これは・・・まるで牢獄だ。

「・・・ふう、誰かいなかな・・・」

辺りを見回してみるが、どこに行けばいいのか検討がつかない。真っ暗で足元も見えない。完全に立ち往生だ。

・・・シャリ・・・シャリ・・・シャリ・・・シャリ・・・

「っ！」

なにかが擦れる音。右のずっと奥の方から聞こえてくる。

「・・・」

僕は、その音に引きつけられるように、奥へと足を進める。

進めば進むほど、その不気味な音に近づいていく。ここまで来る

と、どのあたりが音源なのかがわかった。

僕から見て右側の列、あと二つ、三つほど先の部屋だろうか。もうじき到達しそうだ。

「……………」

ただでさえシーツ一枚なのに、奥に行くほどどんどん寒くなる。

さらに、恐怖で身がガタガタ言ってる。

周囲は、本当に真っ暗で、明かりひとつ無い。素足で歩いていると、地面の冷たい感触が直に伝わってくる。ザラザラしていて、たまに踏む小石が痛い。こんな先が見えない道のりが続いていると思うと、すぐに足がすくんでしまいそうになるが、ここから脱出するためには、とにかく前に進むしかない。きつとどこか、出口があるはず。そう自分に言い聞かせながら、じわじわと接近しつつあった。

*

ついにたどり着いた。音がする部屋は、もう目の前にある。

「……………（ゴクツ）」

ゆつくりと、その距離を縮める。

壁に身を寄せて、そっと覗いてみる。

なにかを砥ぐような音はするが、誰かがいるようには見えない。

「……………？」

こんどは、身を出して中を覗く。鉄の檻が何本もあって、それにすこし触るだけで錆がつく。こんなところに人なんているのだろうか。とても、人がいる雰囲気はない。するのはシャリシャリという音だけ。ん……謎だ。

「はあ……………」

ちょうど部屋の真ん中辺りに来て、しゃがみこむ。せつかく怖い思いしてここまで来たのに、なんか疲れた。急に、何もしたくなくなった。

そのままの体制で鉄檻を掴み、もう一度中を見る。今度は、よー

く目を凝らして……

『……はっ（ビクウッ！）』
「……………」

ん？いま微かに、何かが動いたような。途端に、さっきの砥ぐ音も止まった。

おかしい……
「……………」

僕は、掴んでいた鉄檻を揺らしてみた。なかなか大きい音が響き渡る。

『つつ！……！』

ゴツツ……

鈍い音が部屋の奥からした。なにかをぶつけた感じた。ガサゴソと、地面を蹴っている様子が想像でわかる。

どうにかして確認しようと試みるが、はっきり見えない。なにかいるのだろうか。よし……

ヒュツ……

落ちていて小石を投げる。

コツン……

直撃。

『イタツ……』

あ、声。絶対なにかいる！引きずり出してやる――

パチッ

「・・・あ」

「え！？え！？な、なに！？えー！！？」

突然全体が明るくなった。というより・・・

「なにしてんの・・・？」

「・・・あ、あれ！？あ、え、えと、あ、あれ！？」

部屋の隅っこで、正座をしながら前にうずくまっている人発見。

その前には、さっきまで使っていたと思われる砥石と、ナイフのよ
うなものが置いてあった。おそらく、こいつが原因だろう。

「あ、あのさ？」

「あえ！？え、や、あ、つと！？」

「もしもし？」

「あ~~~~！！！！も~~~~な、なに！？や、やだー！！！」

だめだ、コミュニケーションが成立してない。かなりのビビリよ
うだ。っーか、声でけえな・・・

コツコツコツコツ・・・

「っ！！！」

「ひっ！！！」

ふいに、足音がする。僕が来た方向からだ。緊張が走る！

「あ~~~~やだやだやだやだ・・・」

巨体を最大限小さくして、隅に丸まるビビリ。なんか、小動物み
たいになっている。

おっと、ぼんやり観察してる場合ではない。僕も、なにか身を守
るすべを見つけないで！

キヨロキヨロと辺りを見て、隠れられそうなところは・・・

ちよこつと蓋が開いたマンホール。

しょうがない！ここは、清潔かどうかなんて関係ない！とりあえずここに身を潜めよう。

「・・・」

接近する足音。もうすぐそこだ！

コツコツコツコツ・・・ぴたっ

止まった。もしかして気づかれた！？いやいや大丈夫だ。たぶん・

・

「・・・」

「もゝまた大声出してえ、だめでしょ、モッチー？」

なんだ、誰の声だ？なんか聞き覚えのある声のような気が・・・

「ほゝら、出ておいで」

「えゝゝ・・・い、いいよ、僕は・・・」

ビビりの声もする。なにか話しているのか？

「なんでよゝ、ここ寒いじゃんかゝ、あっち行こうよ」

「だ、だって・・・あっち行くと、みんなでば、僕を、いぢめるもん・・・」

「そんなことないって。みんな優しいよ？」

「こ、こないだだって、いきなり僕の、あ、頭に、焼き鳥の串、刺してきたじゃないか・・・」

なにがあったモッチーいいいい！！

「あれは事故だって、ピカイチも謝ってたじゃん！」

「う、上原さんだって・・・一緒になつて——」

「もーっ！！いいからはやく来いっての！！絶対連れて行くからなつ、ここに鍵あるからなつ！」

『な、なんで！？僕が持つてるはずなのに・・・』

『合鍵だよ、やつすーに作ってもらったから』

『そ、そんな～～！？』

なんか窮地に立たされているモチー。声しか聞こえないけど。外を確認してみるために、マンホールの蓋を少し上に上げた。そこで見たものは・・・

『ほらほら～あけちゃうよ～』

『いや～～～！！お願い許して～～～！！！！』

昨日、僕の腹の上に乗っていた、ぱつと見小学生の暴力女が、鉄檻の向こう側に腕を回して、内側から鍵を外そうとしていた。モチーは先ほどにも増して、泣き叫んでいた。そんな嫌なら抵抗しろよ・・・

ガチャンッ

あ、開いた。

『突撃～～！！』

『ぎゃあああああああああああ！！』

がつつりとモチーを捕まえ、強引に出そうとしている。見た感じとても愉快だ。

『い～く～よ～』

『い～ぎ～だ～ぐ～な～い～』

「・・・」

でも、なんか可哀想になってきたな・・・

どうする・・・モチー嫌がつてるし、助けてやりたいが、相手はあの凶暴女。しかも身なりはシーツ一枚という圧倒的不利な状態で出ていくわけにはいかない。へたに動き回るとシーツがヒラヒラ

して、立ち振る舞うこともできない。んんん―一体どうすれば・・・
ガタン！

『っ！』

『ひっ！！』

「っ！」

ヤバ・・・足を滑らせてしまった。その拍子に、上げていたマンホールの蓋が大きく動いて、蓋が壁にぶつかる音が響いた。

ど、どうしましょ・・・こっち向いてるし、けっこう大きい音したから、ぜってえ気づいたよなあ。このまま隠れていようか？いやいや、どのみち身動き取れないこの場所で逃げることなんて不可能。ここは何もなかったことにして、息を潜めよう。

そつと、蓋を閉めて・・・

「なにしてるの・・・？」

「・・・あ」

大きな瞳が目の前に現れた。いつの間に近づいてきたんだコイツ！？

頭の中で一生懸命葛藤していたから気づかなかったのか・・・

*

「ちょっと！なんであたしがアンタなんか回避れなきゃいけないの！？」

「人の腹の上でスナック菓子食うやつを避けてなにが悪い？？」

「だって、座るとこなかったんだもん！いいじゃんお腹の上でお菓子食べても」

「よくねえよ！もつずっと腹がベタベタすんだけど。っーかどうも

思わんわけ!？」

「なにが？」

「他人だぞ!？見ず知らずの人の腹で菓子頬張るやつがどこにいる!？」

「いるかもしれないじゃん!世界中探したら100や200ぐらいいるんじゃないの!？」

「全世界もれなく探してもお前しかいねえよ!！」

はあくなんかコイツと会話していると無駄に疲れる・・・まるで妹と口喧嘩してるみたいだ。

その小さい背丈を伸ばして、いちいち答えるのが面倒くさい屁理屈を言い放つ姿は、なんだか幼く見えて、本当に同級生かと疑ってしまう。か細い華奢な体きゃしゃに、身長と同じぐらいの長い黒髪。白に薄いピンク色が少し混じったワンピースは、なにもない牢獄のようなこの場所ではよく映えて見える。

きつと黙っていればそれなりに可愛いんだろうけど、こんな性格が破綻したやつだと知れば、とても残念に思う。

「ったく・・・お互い名前も知らんのに・・・」

そう言い捨ててみると・・・

「へ?名前?ああ、清香だよ、上原清香」

いきなり名乗られた。別に求めたわけじゃないんだけど。

とりあえずこつちも自己紹介ぐらいしておこう。

「僕は立岡瑛だ。よろしく」

「えええええ・・・」

「な、なんだよ・・・」

なぜ引かれる?

「自分のこと『僕』って言うんだ・・・なんか気持ち悪い・・・」
「なんでだよ!？」

初めてそんなこと言われた。そんなに変わるうか。

「だって、あんまいないよ?自分のこと『僕』って言う人。あたし初めて見たかも」

「普通だと思っけど」

いままで意識してなかったから、急に使いにくくなってしまった。
「とにかくっ、もうアンタとは口利かないから!」

「急に話変えたな」

「うっさいな!! 面倒なんだよアンタと喋ってる!」

「なっ・・・」

僕が思っていたことそのまんま口に出された。なんたる屈辱・・・

「そ、そうかよ! それは悪うございました!!」

「さっさとどっか行けよな変態!!」

「誰が変態じゃ!」

「そのシーツの下、何も着てないやろ! そんな臭いかつこで歩き回んな!!」

「そういうこと考えてるお前の方が変態だろ!!」

「うっさい!! 人より少し想像力が発達してるだけだよ!!」

「・・・なんだ、自分で分かってんじゃん」

「・・・」

『しまったー』って顔してるよ。こいつはきつとバカだ。

「自分で言っでどうすんだっての。バツカじゃねえの?」

「・・・」

下を向いて黙ってしまった。自分の頭の悪さを認識したのだろうか。

「・・・」

「・・・なんだよ、なんで黙っちまうんだよ」

しゃがんで顔を覗いてみるが、前髪が垂れてて見えない。

もしかして怒った?

「・・・ぐす・・・」

「・・・???」

鼻をすする彼女。一体どうした――

「・・・うううう・・・ぐすっ」

「え・・・」

うそ、泣いてるよこのコ。

ワンピースをぎゅっと握って、立ち尽くしている。

しまった、ちよつと言い過ぎた。一応初めて会った人だから加減したつもりだったんだけど。コイツ泣き虫だったかー。

もうどうしよう。同級生泣かせちゃったよ・・・

「・・・」

あ、モッチーの存在を忘れていた。まったく喋らないからどっか行っただかと思っていたけど。いたんだ・・・

「・・・」

「・・・なに見てんだよ」

「ひっ・・・」

いちいちビックリするなよ。一体なんなんだコイツら・・・

「ひっく・・・あうううう・・・うううう」

「えーと・・・」

謝った方がいいよな。

「その・・・悪かった。言い過ぎたよな・・・ゴメン」
「・・・」

反応がない。ますます小学生に見えてきた。

「なあ、顔上げてくれよ・・・」

ようやく泣き止んではくれたが、完全に拗ねてしまったようだ。なんだか小さい子供をあやしているようだ。

「・・・い・・・」

「ん？」

「いぢわる・・・しないでえ・・・」

「つつ！！！」

こ、これはっ・・・！

涙目で頬を赤くしながら、こつちを見て小さな声でつぶやくその姿は、いままでの上原のイメージを180度ひっくり返した感じだった。

強気だったさっきまでとはえらい違い。じつは本当に小学生なのかもしれない。

しかし、この顔は反則だろ・・・

「や、優しくしてよあ・・・」

「わ、わかったから・・・もう泣くな。な？」

「・・・」

コクンと頷いてくれた。

どうして僕がこんなことを？そもそも中3にもなつて『バカ』って言われただけで泣くやつが存在していたのか。じぶんのこと『僕』って言うやつより珍しいよ。

「・・・ん」

「んあ？」

僕の体に巻いてあるシーツをグイグイと引っ張る上原。僕はしゃがんだままだから、バランスを崩さないように脛脛に力を入れた。

「ん・・・ん！」

「なんだよ、しゃべれつて」

「こつち・・・きて」

「??」

どこに行くのだろうか。すつと立ち上がる僕を待たずに、ほんもと来た廊下を足早に歩き始めた。

ちなみにモッチーは放置プレイだ。後ろから喘ぎ声が聞こえたような気がしたが、上原はシーツを掴んだまま進んでいくからしょうがない。たぶんまたここに来るだろう。

また会おう、モッチー！

*

それにしてもどこへ向かっているのだろう。進んでも進んでも同じ牢屋ばかり。何ひとつ変わらない風景が永遠と続いている。

「なあ、どこいくの？」

「うつさい」

「ここはどこなんだ？」

「うつさい」

「お前は誰だ？」

「うつさい」

駄目だ、まったく人の質問を聞いていない。まだ少し怒っているのだろうか。それに・・・

「ちよつと歩くの速くない？僕こけそうなんだけど」

「いいよ別に。引きずっていくから」

「お前はそれでいいかも知れんけど、こっちは下何も着てないということ知ってる？」

この格好でこれれば、大惨事は確實。そのまま引きずられていたら大変困る。

「うつさい露出狂」

それに陥れようとしているのはお前なんだが・・・

「服。何か着るもんいるやろ」

「まあ、それは是非いただきたいけど」

「みんなのとこ行ったら何かあるかも知れんから、急いで行ってるの」

そうか、だからこんなに急いでいるのか。なんだ、案外優しいじゃないか。きつと根はいい子なのかも。

「・・・そ、そっか。そいつはサンキューな」

「そんなかつこでウロウロされたら、もしアンタを見かけたときに目が腐っちゃうから。アンタのためじゃないから。みんなの健康のためにやってるんだから」

「あーはいはい。そーですか」

前言撤回。くそ意地の悪い最悪な子だよちくしょー！

「ところで、聞きたいことあるんだけど」

「いや、アンタと会話してたらその声を聞き取る耳がおかしくなつてそこから神経を伝って全身が麻痺して一生寝たきりになるアンタに触ってるだけで皮膚が壊死しそうなのに」

間髪いれなかったな。どんだけさっきので嫌われたのだろう。

しかし、その割にはしつかりとシーツを掴んでいたりする。これは典型的なツンデレなのだろうか。口にしてることと、行動がまるで連動していない。おもしろい子だ。

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

渋々問いただす。

「黙ってついて来い。気持ち悪い」

ここまで言われると、さすがの僕でもグサつとくるものが・・・

「・・・ついた」

「へ?・・・うわっ」

一人でへこんでいた僕は、いきなり止まった上原にぶつかりそうになる。

彼女が立ち止まった場所は、黒くて重そうな扉があるだけ。錆が付いていて、取っ手なんか少しでも触れただけでボロボロと崩れ落ちてしまいそうだ。

「・・・ここか？」

「・・・」

うんともすんとも言わずに、上原はゆっくりと目の前の錆だらけの取っ手に手を伸ばした。

そして、その手が取っ手に触れた瞬間――

ズガーーン!!「ぎゃふっ」バターーン!!

「・・・」

一瞬で扉が粉々に吹き飛び、僕の目の前にいたはずの上原は、扉の前の壁の方で目を回して倒れていた。

「・・・・・・・・」

最近あまり驚かなくなってきたような気がする。ちょっとやそつとのことでは、なんとも思わなくなった。まったく、変なスキルを手に入れてしまったようだ。

「・・・おい。だいじょーぶかー」

適当に呼んでみるが、当然起きるわけがない。まったく、なんで鉄のドアが壊れるふぎやあつ！！

ズザー・・・

み、右半分が・・・体の右半分に激しい痛みがああ！！

なんなんだいきなり！？

なにかが僕にぶつかって、その反動で飛ばされた。おかげで、右上半身が擦り傷だらけになってしまったじゃないか！！

『おいお前っ！！俺のカスタードシュークリーム食べたろ！！』

『つてーな・・・ぎゃーぎゃー騒ぐんじゃねーよ。お子様かてめーは』

『俺が、俺がどんだけこの日まで我慢してきたことか・・・』

『そんなの知ったこっちゃねーよ。そんな無駄な努力は、シュークリームと一緒に遠い彼方に飛んでいった』

『俺のシュークリームが、俺を置いてどこかに行ってしまうことなんて絶対ない！！』

『早く食べてくれないから、きつと愛想つかして消えたんだ。賞味期限も迫っていて、彼は精神的にも苦しんでいたんだろっ』

『お前にシュークリームの気持ちかわかるかああ！！』

『わかるさ。お前、あれだよ、上原が食ったんだよきつと』

『口の周りにカスタードつけてよくそんな嘘つけるな！？』

『嘘じゃねーよ。俺見たよ？幸せそうな顔して頬張ってるの。ホント見たから』

『この期に及んでまだ認めない気が!!』

『だから食ってないって。いい加減にしるよこの糖尿予備軍が』

『たまにしか食えないから楽しみにしてたのに!!!』

『今回をきっかけに甘いものを卒業しろ』

『そんな〜』

目の前で行われるシュークリーム討論。なんだこの糖分だらけの争いは・・・

よく見ると、さつきから顔を真っ赤にして、憤怒の形相を見せているのは、僕がここで始めて目を覚まして、上原（あっちの方で気絶してる奴）から命を奪われそうになっていたときに、ギリギリで助けてくれた人だった。

そういえば、彼の名前を聞いていなかった。きっとこの人が僕をここまで運んでくれたのだらう。きちんとお礼を言わなければいけない。

それと、もうひとりの人は・・・

さっきの人と同じぐらいの身長のある男の人。髪は少し赤色が混じったような色。ズボンのポケットに左手を突っ込んで、右手で乱れた髪を直すその後姿は、どこかだるそうなオーラをかもし出している。

僕は、ゆっくりと起き上がろうと、体を起こした。

「くっそ！ぜってえ許さんぞ！！その辺に転がってる鉄パイプをおめえの鼻にねじ込んでやろうか！！」

それは物理的に不可能だらう。

「なんでそーなんだよ・・・あ、そーだ。こいつだよ、お前の毛玉入りシュークリーム食ったの」

いきなり僕を指差す赤毛の男。なぜに僕？

「そんなもさもさしたシュークリームあるかつ！！っ！か、こいつは関係ないだろ!？」

「本当にそう思っんなら、聞いてみるよ」

聞いたところで、何にもならないと思うけど・・・

「おいお前っ、食ったのか！」

こいつバカか？

「あ・・・あのさ、あいつ・・・」

「あ？なんだ？」

「すごい勢いで逃げたけど」

「なに！？」

僕と上原が来た方を全速力で疾走していく男を指差す。

「こんにやろー！！！！ぜってー泣かすっ！！」

すぐさま追いかけるバカ。とても命を救ってくれた恩人とは思えない。

「・・・名前聞けないじゃん」

タイミングが全然合わない。段々面倒くさくなってきた。

「・・・あのお・・・」

「ん？」

走っていく様子を見てみると、粉々になった扉があったところから、女の人の声が聞こえた。

振り向くと、少しだけ顔を出した、見た目は僕と同じぐらいの女の子が、恥ずかしそうにこっちを見ていた。

「大丈夫ですか？怪我とかないですか？」

「あ・・・うん」

今にも泣き出しそうに目を潤ませた大きな瞳に、臆病な声。僕を警戒しているのだろうか。そこから出てこようとは思わない。

「・・・っち・・・」

「？」

小さく呟かれた。何て言ったのか聞こえなかった。

「・・・なに？」

優しく問いかける。

「・・・っ・・・っ」

何か言いたげな様子。口がもごもご動いている。

「・・・こっち、来ませんか・・・？」

顔を真つ赤にしながら、彼女はそう告げた。

「・・・ああ」

「食べ物とかつ、飲み物とかつ、あと・・・えつと・・・服も、ありますよ？」

「・・・いいのか？」

こんな、誰かも分からない人間を迎え入れてくれるのか？

「っ・・・はいっ」

僕は、おもむろに立ち上がり、彼女の方へと歩き出した。

彼女が待つあそこまでの距離が、果てしなく遠く感じた。

思えば、僕はずっと一人だった。友人も死に、帰るところも、安らげるところも無かった。

『こっち、来ませんか？』

彼女にそう言われたとき、僕は頭の中が真つ白になった。

とても、嬉しかった。

誰かに、そう言っただけだったから。

「・・・・・・」

そつと、手を差し伸べる彼女。

僕はただ、その手のある方へ歩き続けた。

この薄暗いなかで、彼女のその姿は、これまでの苦勞と悲しみと不安を、すべて取り去ってくれる。そんな気がして、安心できた。

突然現れたこんな僕を、優しく包み込んでくれる、天使のような存在。

僕は、そんな彼女と、新しい人々に出会った。

これから苦樂を共にする、大切な

仲間

ACT・14 出会い（後書き）

今まで読んでくださった方々、遅れてゴメンナサイっ

受験も終わり、これからは、どんどん執筆していこうとおもいます。

今後も、「インパクト」をよろしくお願いします!!

「あ、私っ、高柳月美っっています・・・月美でいいですよ」

「ああ、そうか。僕は、立岡瑛だ。よろしく」

彼女は微笑みながらうなずいた。

月美が言うには、どうやら上原やさっきの男二人のほかに、人がいるらしい。

僕は案内されながら、なぜみんなここに集まっているのかを聞いてみることにした。

「なあ、聞きたいことがあるんだけど」

「はいっ！？なんでしよう？」

突然話かけられて驚いたのか、一瞬ビクツとして、こっちを向いた。

「ここにいる人たちは、どういう・・・集まりなんだ？」

言葉が見つからず、どう言っているのかわからない。集まりって言うと、なんか悪そうに聞こえそうだから・・・かな？

「んー、そうですね、まとめて言うそうですね・・・」

少し考えて、こう告げた。

「みんな、桑原くんに助けられた、って感じでしょうかね」

「へ？」

予想していた答えとは違う答えが返ってきた。

もつところ、わけありな事情だと思っていたけど、月美の答えは意外なものだった。

それ以前に、

「だれ？桑原って」

聞き覚えのない名前だ。

「さっき、シュークリームで怒ってた人ですよ」

「・・・ああ、あいつ桑原っていうのか」

本人に聞く前に、月美から教えてもらえた。

「じゃあ、あの髪を赤に染めてたやつは？」

あのやる気のなさそうな感じの人の名前も聞いておきたい。

「あの人は、井口くんです。あの二人はいつでもケンカしてるんですよ」

丁寧に教えてくれる月美。なんて優しいんだろう。

「えーと、話を戻しますよ」

「あ、ああ」

人差し指を立てながら、僕の少し斜め前を歩く月美。後ろからその姿を見ると、名の通り、月明かりを思わせるような綺麗な髪が、肩まで伸びている。

そのふんわりとしたショートヘアーは、思い出したくないあの夜の惨劇を連想させる。異常なまでに輝いていた満月が、目を瞑れば蘇ってきそうになる。

そのくらい美しいうしろ姿の彼女だが、身にまとっているのは、セーラー服だった。

しかし、彼女の身長とセーラー服のサイズが合っていないようだ。彼女の手は、セーラー服によって隠れてしまっていた。

「あのお、聞いてますか？」

「・・・ああ、ごめん」

こちらを向きながら、前へと歩く月美。髪を翻して、上目遣いで確認してきた。

「いいですか？ 桑原くんというのは、ここに一番最初に来た人なんです。あの変な飛行機みたいなやつが来てから、ここに逃げてきた人々を迎え入れたんです。いつの間にか、こんな大人数になっちゃったんですよ」

「へえ、どうしてそんなことを？」

あの正体不明の物体が襲来してきた日、なぜ桑原はそこまで人助けができたのだろうか。自分だって突然の出来事に混乱しているはずなのに。

「きつと、自分と同じ境遇にいる人たち、今となってはみんな一緒

ですけど、そんな人たちを放っておけないんだと思うんです。優しい心を持っている、そんな人だと私は思います」

まるで、桑原のすべてを知っているように喋る月美。その表情は、とても穏やかな顔をしていた。

「なあ、月美は、桑原と幼馴染かなんか？」

「えっ！？あの、違いますよ？別にそんなんじゃないです・・・」

急に赤くなつて、慌てる月美。そしてさっきより、歩くスピードが若干速くなった。

「あ、おい」

「さっ、ここに集まつてるはずです。どうぞ！」

白い扉のドアノブを右に回して、元気よく扉を開けた。

「みんなあつ、新しいメンバーを紹介しまあーす！！」

いきなり大きな声になる月美。この薄暗い廊下にその声が響いた

『・・・・・・・・』

『・・・・・・・・』

『・・・・・・・・』

うわぁ・・・暗っ。なにこの雰囲気。上原や桑原、それと月美と比べると、彼らのテンションは最悪。なんか、この部屋全体に漆黒のオーラが漂っているように見える。

確かに、あんなことがあつて元気でいられることは難しいだろうけど、これまで会ってきた4人とは正反対だ。

逆に、この月美を含めた4人の方が、この人たちを励ますために、明るく振舞っているのかもしれない。本当は、この人たちのように、落ち込んだり、悲しみに浸ることもあつたのだろう。しかし、次々と桑原が逃げてきた人々を連れてくるものだから、いつまでも泣いていられない、だからあの4人はあんなに平気そうに見えたんだ。

ということは、あの4人は、ここに始めからいたということにな

る。その中でも、桑原はたった1人でここに逃げ込んできて、またここに迷い込んできた上原や月美を温かく迎えたんだ。

さっき月美が言っていたのはそういうことだったのか。だから月美は、部屋に入るとき、あんなに元氣そうにしてたのか。

「あー……。立岡くん、こっちです」

「ああ……。」

足早に月美が歩くものだから、僕もそれについて行った。そのときも、みんなの睨むような視線がひしひしと感じられた。僕は、その方を極力見ないようにして、月美が案内した奥の部屋に入った。扉を閉めたとたん、緊張していてこわばっていた肩の力が、すつと抜けた。

「みんな、ここに来てすぐなんです。お互い名前も知りません」

そんな僕を氣遣うように、優しく話しかけてくれる月美。しかし、その表情は悲しげに見えた。

「そうなのか……。」

そう言うしかなかった。僕だって、ここに来てまだ間もない。もしかしたら、気軽に話しかけると距離が縮まるのかもしれないが、みんな心に深い傷を負ってここにいます。家族も友人も失い、なにも残っていない、そんな絶望感を癒すことなど難しい。どうしようもないのだろうか。

「着替え、ここに置いときますね」

「ああ、すまない……。って、これしかないのか？」

前の棚から、水色の作業着のような服が取り出され、山積みになっっているダンボールの上に、ポンと置かれた。

「我慢してください。こんなものしかないです」

腰に手をあてながらきっぱりと話す月美。

「着替えたら好きに動いていいですよ」

好きになって……。この構造とか、どこになにがあるのかも知らないのに、どこに行けというのだろうか。

「じゃあ、またあとで」

そしてさつさと出て行ってしまう月美。

「……………」

しんとした空気が漂う。学校の体育倉庫のような埃臭いにおいが充満している。

辺りを見ても、鉄の棚にダンボールや重そうな機械が積まれているだけだった。

「……着替えるか……」

ここでじつとしても変わらない。とりあえず、体に巻いているシートを取り払い、渋々作業着に身を包んだ。

＊

慣れない服に苦戦しながらも、ようやく着替えを終えて、やるこ
とがなくなってしまった。

当てもなく辺りを見回すが、これといって自分の興味をそそるもの
はなかった。

『着替えたら好きに動いてていいですよ』

月美の言葉を思い出す。

ここに来ただけの僕には、なかなか難しいことである。

「……………」

ふと、正面の扉に目がいく。

その先には、さつきの連中がいるはず。なんだか硬直した雰囲気
を感じる。重くて、そこにいるだけで、気が参ってしまいそうだ。

しかし、このままここにいるわけにもいかず、少しためらいなが
らも、ゆっくりとドアノブに触れる。

顔も、性格も知らない人たちがいる。それだけで気が遠くなる。
こんな状況下で、居心地の悪そうな空間に、自ら足を踏み入れよう
としている。

そう考えると、急に胸の鼓動が速まり、全身が熱くなる。握って
いるドアノブが、吹き出てきた手汗によっててかっている。

緊張している。まるで、自分が転校生にでもなったかのようなようだ。転校を経験したことはないが、きつとこんな感じになるのだろうかと思った。

そんなどうでもいいことを考えてしまう。

「・・・ふう」

深呼吸をして落ち着く。あまり焦ってもだめだ。もっと気楽に、そう、友達と話してみたいに何気なく接してみよう。普段の僕ならたやすいことだ。きっと大丈夫。

「——ッ！」

覚悟を決め、掴んでいるドアノブを捻った！
そのときだった、

ズガー——ン！！

「立岡瑛はどこだあああッ！！」

聞き覚えのある怒鳴り声と共に、前からの衝撃で後ろに吹き飛ばされた！？

この声、桑原かつ！

「いつてえッ！」

壁に叩きつけられたせいで、背中に激痛が走り、おもわず声が大きくなる。

「ようやく見つけたぞ、ここにいたのか。まったく、お前んとこ覗きに行ってもいないもんだからよ、探したぜ」

その手には、シュークリームの入ったプラスチックケースが。

「おいしい！何してくれとんじゃ！」

すぐに起き上がり、桑原に歩み寄る。

さつきと合わせて2回も吹き飛ばされたんじゃ黙ってられない！
「当たり前のようにドア突き破りやがって！なに？ドア開けるっていう習慣ないの？」

「えっ、なんでそんなに怒ってんの？」

「怒るわ！2回吹き飛ばされたんだぞ！？しかもさっき普通に話したのにスルーしたじゃん！」

「あー……」

遠い目をして当時の状況を思い出そうとする桑原。

「すまん覚えてない」

「だろうな！おかげで全身打撲だらけだよ！めっちゃいてえよどうしてくれんだ！」

背中を自分でさすりながら訴える。

「シュークリーム食うか？」

「あ、マジで？じゃあ遠慮なく……って、ちつがーうー！」

くそっ、なんて美味そうなシュークリームなんだ……

「なんだよ、んじゃこっちのエクレア……」

懷から取り出そうとしている。

「そーいうことじゃねーよ！？つか、よくこんなところにシュークリームとかエクレアとかスイートポテトとかあるな！？」

「スイートポテトはない」

「どーでもいいよ！！」

なんだこいつ！月美の話聞いてて、いいやつだと思ってたのに全然アホじゃん！自分でも、なにを言っているのかわからなくなっている。

「あーもうっ！！ケンカは……やめて……くださ……い……」

そこに、月美が割って入ってきた。どうやら僕達の大声に気づいて飛んできたようで、息を切らしている。

「別にケンカじゃねーよ……なあ？」

僕の肩にポンっと手を置く桑原。

「……っ」

丸く収まってしまうようだが、なんか納得できない。そっと、桑原の目をみる。

「（ニコニコ）」

「……………」

なんだあの満面の笑みは……！つい目を逸らしてしまう。
逸らした視線の先は、

「……………」

「……………」

「……………」

白い目でこっちを見ている暗い集団。冷酷な眼差しが恐ろしく痛い。きつと、黙視し続けると、死んでしまっただろう……そんなに無慈悲なやつらなのだろうか。

「……はあ」

ただ、ため息しか出なかった。もう激しく逃げ出したい……
「そーいや、自己紹介がまだだったな。桑原広希^{ひろき}だ、よろしく」
「知ってるよ」

勝手に自己紹介を始める桑原に、そう言った。

「えっ、なんで知ってるの！？怖っ！」

大げさに驚く桑原、いちいちテンション高いな……

「月美に教えてもらったんだ。お前、僕と会ってもシカトするから」
少々嫌味に言ってみた。

「ああー、あれは嘘だよ、嘘。実際気づいてたよ？うん」

「嘘つけ！！」

「ホントだつて。あれだろ？たしか、あんとき……え」と……
れ、練乳めっちゃ吸ってただろっ！！」

「わっけわかんねえよ！？どーしてそんなに、次から次へと甘い物
が出てくんだよ！！」

思わずつつこんでしまった。

「じゃあ、落花生か……」

「じゃあつてなんだよ！！取って付けたようなことばっか言いやが
って！ふざけんな！！」

「ふざけてねえって。俺は、出来るだけ穩便に」
「なにが穩便にだ！上手く逃げようとすんな！！」
「だぁー！かぁー！らぁー！っ！ケンカしないでー！！！」

このまま永遠に叫び続けてしまいそうだ・・・

*

「・・・おい・・・おいつ、しっかりしろ！」
「っぐ・・・ああ、だい・・・じょうぶだ・・・」
「よかった・・・よし、いま出してやる」
「すまねえ・・・っ」
「よ・・・つと・・・よし、これでなんとか・・・」
「・・・っ、どうした・・・」
「なんだ・・・そんな、泣きそうな顔、して・・・」
「お、お前・・・足、足が・・・」
「？足が・・・どうし」

バグチユウウー！！

「！？」
「あああああああ！！！！痛い！痛い痛い痛い！！！！あ、
足があああつ、がああああ！！！！」
「なんだよ・・・なんなんだよおおー！！」
「おいつ！まで、待てって・・・ごふあつ・・・っ待てよ！！！！」

メキ・・・ベキベキベキベキ・・・

『ぐわあああつ、し、死ぬつ、死ぬ死ぬ死ぬ！！マジっ・・・げ、
げえええ・・・おええ・・・』

ぶちぶちぶち・・・ベシヤアア・・・

すべてを一瞬で奪われた日から、もうどれぐらいたつのだろう。
愉快的仲間と出会い、居場所もある。そのせいか、いつの間にか、
襲い来る「謎の敵」への恐怖が、薄れてしまっていた。

現実から目を伏せ、この世のあり様を否定しようとしたが故に、
「彼ら」に時間を与えてしまったのである。

「彼ら」は、この星の環境に適応した姿となり、まるで微生物の
ように観察されながら、逃げ惑う人間を追い回す。その光景はまさ
に、人間が微生物を研究する際、細胞を染色したり増殖させたりす
る作業と、何ら変わらないのである。

そして、その実験の犠牲にされる者は、皮膚を食い破られながら
体内に侵入され、ありとあらゆる内臓を貪り喰われ、体内から自分
の胸を突き破って出てくる生物に苦しみながら死んでいく。

泣き叫ぶ者、助けを求める者、あるいは、素直に現実を認めあき
らめる者。しかし、どれもみな、例外なく死んでいく。

漆黒の夜空に血生臭い異臭が漂うこの街に、不気味な咆哮が木霊
した――

「んん、美味しい」

「だろ。このカリカリのシューをひと口頬張れば、溢れんばかりのカスタードクリーム！まさに、この世の宝だな、うんうん」

僕は、シュークリームに舌鼓を打っていた。なぜこうなったか、話せば長くなってしまうので言えないが、要するに、僕が妥協してしまったのだ。きつとコイツと対立したとしても、あんなアホ丸出し野郎には勝てないと思う。

それに・・・

「ああ、幸せだ・・・」

こんなに美味そうに食うやつに怒れない。

それに、この場所について聞いておきたいことがある。

ここが一体どこなのか。そして今、外では何が起きているのか。本当なら、ここに来てすぐに聞くべきだったが、気持ちの整理や状況の把握が追いついていなかったから、重要なことを知れずにいた。

きつと、桑原に聞けば何か分かるかもしれない。

「なあ」

「ん、なんだよ瑛」

どんどん溢れてくるクリームを上手に舐めながら返事をする桑原。さつそく下の名前で呼ぶのか。まあ、そっちの方が呼ばれ慣れるからいいけど。

「ずっと聞けないままだったんだけど、ここはどこなんだ？」

「ああ・・・」

残りのシュークリームをひと口で食べると、桑原はさっきまでの態度とは違う、何かを考えるような表情になり、黙ってしまった。どこか気に障るようなことを言ってしまっただろうか。

「ここは、罪人が集う拘置所だよ」

「えっ……？」

一瞬、胸がきつく締め付けられるような感覚が全身に走った。
桑原は遠い目をして、淡々と語り始めた。

「俺、元々ここにいた人間なんだ」

「……え、そ、それってどういう意味、だよ……？」

ここにいたということは、桑原がなにか罪を犯したということになる。一体なにをしたというのだろう。

「……」

「……っ桑原？」

一点を見つめたまま、悲しそうな顔になり、そして、まるでなにかを諭すように微笑んで、こう答えた。

「俺さ、家族を殺したんだ……」

「……っ!!」

「俺がまだガキのころ、両親が離婚して、親父が出ていつちまったんだ。お袋は、女手ひとつで俺と中3の姉を育ててくれた。あんとき、お袋と姉ちゃんのことが大好きでよ、ずっと一緒に暮らしていくんだって、そう思ってた」

「……」

「けど、俺が中2のとき、俺が学校から帰ってきたら、玄関に見たこともない靴があったんだ。すぐに嫌な予感がしたんだろうな、靴履いたまま上がって、いつもお袋と遊んでた畳の部屋まで走って、障子を開けたんだ。そしたらさ……」

「っ……」

僕は、この先を聞くのが怖くなっていた。

「お袋と姉ちゃんが、知らねえ男とセックスしてたんだ……最初は何してんのか分かんなかった。でも、すぐにいけないことしてるんだって気づいた。すんげえ幸せそうな顔してたんだ、2人とも。けど、それ見たら、なんか悔しくなって……」

もう、どんな反応をすればいいのか分からなかった。

「裏切られたっていうか・・・なんかこう、ずっと傍にいた一番頼れる存在が、どんどん離れていっちゃう気がする」

桑原は、自分の手のひらを眺めながら続けた。

「気づいたら、3人とも殺してた。結構簡単に。家族の絆って、こんなにあっさり無くなるんだなって思ったよ。不思議と、悲しいとも感じなかった・・・」

「・・・」

しばらくの沈黙が続いた。

桑原にかける言葉を必死に探していたが、その前に桑原が口を開いた。

「・・・すまん、忘れてくれ」

「・・・」

そう簡単に忘れることはできないだろう。話の内容があまりに重過ぎて、耳と頭に焼き付いてしまった。

こんな話をされるなんて思ってたなかった。あんなに気楽に振舞ってる桑原に、そんな過去があったなんて。

「ごめん、なんか辛いこと、思い出させたみたいで・・・」

こんな拙い言葉しか言えない自分が、憎かった。もっと桑原を励ましてあげたかったのに、簡単な、取って付けたようなことしか出てこない。こんなじゃ、彼の心の中にある深い傷を労わることができるはずがない。

それなのに、

「なに、気にすんな。勝手に喋ったのは俺だからな」

そう言って、優しく微笑むのだった。

「奴らがここに来たとき——」

「っ！」

急に喋りだす桑原。しかし、ここは黙って聞き入ることにした。

「もう戻れないって思ってた外に出られたんだ。あいつらが何もかもぶっ壊してくれた。嬉しかったんだよ」

桑原が言っているのは、あの謎の物体がやって来たときのことで、僕が逃げ惑っているあいだ、桑原はずっと、この拘置所にいたのか。

「でも、他の人間がどんどん死んでつてさ。そしたら、あんときの光景が重なって見えて、心の底から『怖い』って思った」

「・・・・・・」

僕がああ惨劇を直視したときも、素直に怖いと思った。きっと誰もがそう感じるだろう。

「中にいたときは、もうこのまま死んでもいいって思ってたけど、目の前で人が瓦礫に巻き込まれて潰されるのを見て、死にたくない、『生きたい』って思った」

「・・・・・・」

「必死で逃げて、逃げまくって。この拘置所の地下にまで逃げ込んできて、奴らがどつか行くまで待った。そんなときやっと、助かったって思ったけど、上にいた人達はどうなったんだって、ふと気づいて。俺だけ助かってもだめだって、生き残りをここに連れてこようって考えたんだ」

なるほど、地下なら攻撃が当たる心配はない。

このとき、僕は改めて桑原広希という男の器の大きさに、強い感銘を受けた。

自分の体だってボロボロのはずなのに、そんな状況で人を助けようとする、そんな考え自体、僕にはなかった。なんとかして生きようと、自分のことで精一杯だった。

それなのに桑原は、人のために何かをやるうとして行動していたのか。

「いや、それはただ、どうにかして自分の罪を償おうとしたかっただけなのかもしれないがな」

そう言っ、苦笑いをする桑原。

「そんなことないよ。僕がそんななら、きっと出来なかった。すごいよ、お前は」

「やめろよう・・・照れてねえぞ、コノヤロ」

明らかに照れてる。顔が真っ赤だ。

「なんだそれ」

僕と桑原との距離は、この会話でぐつと縮んだように感じた。

*

まもなくして、吹っ飛ばされて気絶していた上原が目を覚ました。彼女は僕を見つけるなり、「うざっ」だの「きもい」だの「死ね」の一点張り。まだあのことで怒っているようだ。

どうしたものかと、溜め息まじりに頭を掻いていると、

「・・・だ、・・・だよ・・・」

「・・・っ！・・・」

「・・・？」

なんだ？どこかで声が聞こえる。おそらく、さっき月美に案内される時に通った、あの少し広くて、ソファアが三つほど置かれていた部屋からだ。口調からして、明らかに言い争っている様子。

「なんだ、騒がしいな」

桑原も気が付き、声がする方へ歩いて行こうとした。

そのときだった――

ガターン！！！！

「っ！！」

「おいおい、なんなんだ一体」

一気に桑原の顔が険しくなる。

僕も、ただならぬ嫌な予感を感じる。何が起きているのか分からない分、余計に緊迫した雰囲気包まれている。

「まったく、しょーがねーなあ・・・」

面倒くさそうに自分の頭を、ワシヤワシヤッと掻き毟りながら、その方へ歩いていく。

僕も自然と、桑原のあとを追った。

まず目に映ったのは、先ほど桑原とシュークリームでなにかともめていた、たしか、井口という死んだ魚のような目をした男が、床に尻をついていた。その周りには、ガラスのコップの破片らしきものが散乱していた。おそらくさっきの音は、このガラスのコップが床に落ちて割れたときによるものだろう。

そしてもうひとつ、井口がじつと正面を睨み付けるように見つめている。僕は、その視線を追った。その先には――

「はあ・・・はあ・・・」

呼吸を荒くした少年が立っていた。見た目は桑原や井口と比べて背丈は小さく、どっちかというところ肌の色は白く、何かスポーツをやっているような感じではない。小刻みに震え、よく見るとその目には、涙が滲んでいた。

「・・・」

しんとした空気が漂う。みんな突然のことに啞然としていた。

「ってーな・・・おいクソガキ、いい度胸してんじゃねえか。ああ？」

沈黙の中に、低いトーンの声が重く響いた。井口はゆっくりと立ち上がり、服をパンパンと払いながらそう呟いた。

「・・・」

突きつけるように放たれた言葉に、ビクッと反応したあと俯いた。井口は、その姿を見据えてこう言った。

「あらー、そんなに怯えちゃって。なに、怖いのか？ママがいないと不安？」

馬鹿にするような口調で話しかける井口。そして黙ったままの少年の方に歩いていく。

「寂しいのはよーく分かるから。よしよし、俺がなぐさめ――」

「っ！」

それは一瞬の出来事だった。少年に近づいていった井口の動きがピタッと止まったかと思ったら、少年の腕が井口の体の前をサッと横切った。

「？」

僕と桑原は、何が起きたのか分からなかった。ほんの少し、時が止まってしまったのではないかと感じてしまう。

だが、すぐに違うと確認することになる。

「——っ」

井口の右手が、ゆっくりと腹部に添えられた？そして、

パタ・・・パタアア・・・

遠くからでも認識できるほどの紅い液体が、井口の足元にポタポタと落ちていく。

「・・・・・・・・」

少年の手には、ナイフらしきものが握られていた。

「おいおいマジかよ・・・」

焦る様子もなく、井口は口を開いた。

「ひっ・・・・・・・・」

偶然近くにいた月美は、目の前でその光景を直視してしまい、かなり怯えている。

「井口！！」

横にいた桑原も、突然の出来事に驚愕している。

「・・・あいつ、なんであんなものを・・・！」

僕は驚きと同時に、怒りが込み上げてきた。

「・・・いくらガキでも、やっちゃいけないことぐらい・・・わかんたろーよ・・・」

ああして気楽に話しているが、滴り落ちる血の量から考えてかなりの傷を負ったはず。

なんで・・・なんで、こんなときに、そんなことすんだよ!!

「っ！テメーッツツ!!」

なぜか僕は、あの少年に向かって走りだしていた。理由なんかない。ただ、すごく嫌だった。

「おい！瑛!!」

後ろで僕を呼ぶ桑原の声がしたが、もうこの気持ちを抑えきれない。

あいつに、井口が味わったおんなじ痛みをくらわせてやる!もうそれでしか、気が治まらない!!

「やめて!あきらくんっ!!」

月美の横を通り過ぎ、少年の方へと接近すると同時に、右手の拳にめいっばいの力を込める。

「うおおおおあああ!!!!」

「うわあ・・・!」

それを見た少年も、僕に向けてナイフを突き出してくる!

「っ!」

「な?」

ドスッ!

あと数ミリでお互いがぶつかり合う寸前。僕は、横から来た何かに飛び付かれ、一緒に倒れた。

「いつつ・・・何やって――」

なおも僕の上に乗っている何かを見ようとした。

「バカアアッ!!!!」

その一言で、騒然としていた周りが静寂に包まれる。

「お、お前・・・」

上に乗っていたのは、上原だった。

「・・・うつ、うつ・・・」

いまにも泣きそうな目。それには、怒りや悲しみにも似た感情が混ざっていた。

「やだよ・・・なんで、なんでこんなになるの!？」

上原の唾がかかる距離。彼女の悲痛な叫びが、僕の高ぶった怒りを鎮めていく。

「みんな、生きてるんだよ!？こんなになってるのに、助かったのに、みんな助かったのに!!」

「・・・」

「なんで、仲良くできないの・・・？」

か細い彼女の声は、その場にいた全員を沈黙させた。

「・・・」

カラン・・・

少年の手からナイフが落ちたのを見て、桑原はその少年を押さえ込んだ。魂が抜けてしまったように、少年は動かなくなってしまった。

「うえ・・・はら」

「もう、人が死ぬのは・・・見たくないよ・・・」

すがりつく上原に、僕は自分を不甲斐なく思った。

そうだ、みんなあの状況でどうにかして生き残ったんだ。その命を大事にしないといけないのに、血で血を洗うようなことをしてしまおうとしていた。

「・・・ごめん」

ただ、謝るしかなかった。上原の言葉は僕だけではなく、この場にいるすべての人に向けての叫びであることは分かっているが、上原のこの表情を見ると、これしか出なかった。

「・・・」

上原はゆっくりと立ち上がり、最後にこう言った。

「・・・みんな、死んじゃだめだよ・・・」

この言葉によつて、僕は生きる意味を見つけた。

この終わりの中で、少しでも、ほんの僅かでも、助かることができるのなら。また、あの日のように過ごせるのなら。生きるんだ。絶対に。

だが、後々になって思い知る。

その程度の決意で、この地獄を生き残ることなんて無理だってことを。

そう、これから起きることが、当時の僕達には予想できなかった。いや、できるわけがなかった。

到底理解し難い現実。それを強制的に突き付けられる恐怖。そして、

世界の終焉を――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1452p/>

インパクト

2011年5月22日12時55分発行